

小松市

白江梯川遺跡Ⅲ

2011

石川県教育委員会

(財)石川県埋蔵文化財センター

しらえかけはしがわ
白江梯川遺跡Ⅲ

2011

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は白江梯川遺跡の第5・6次発掘調査報告書である。第1～3次発掘調査報告書は昭和63(1988)年に、第4次発掘調査報告書は平成元(1989)年に刊行されている。なお、第1～4次の調査原因は県営公害防除特別土地改良事業に係るものである。
- 2 遺跡の所在地は小松市白江町地内である。
- 3 調査原因は梯川河川改修であり、同事業を所管する建設省北陸地方建設局金沢工事事務所(現国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所)が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査の内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が負担した。
- 6 現地調査は平成6・7(1994・1995)年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が石川県教育委員会から委託を受けて実施した。期間・面積・担当課・担当者は下記のとおりである。

第5次調査

期 間 平成6年8月4日～同年12月13日

面 積 2,400㎡

担当課 調査課調査第1係

担当者 藤田邦雄(主任)、浜崎悟司(主任)

第6次調査

期 間 平成7年4月24日～同年8月10日

面 積 2,500㎡

担当課 調査課調査第1係

担当者 三浦純夫(課長補佐)、藤田邦雄(係長)、中西洋司(調査員)

- 7 出土品整理は平成15(2003)年度に実施し、財団法人石川県埋蔵文化財センター企画部整理課が担当した。
- 8 報告書の編集・刊行は平成22(2010)年度に実施し、調査部国関係調査グループが担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は藤田邦雄(国関係調査グループリーダー)が行った。

第1・4章、第3章第3節	藤田邦雄
第2章	森 由佳(前県関係調査グループ嘱託調査員)
第3章第1・2節	浜崎悟司(特定事業調査グループ主幹)
- 9 調査には下記の機関の協力を得た。

国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所、四柳嘉章
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 水平基準は海拔高であり、T. P.(東京湾平均海面標高)による。
 - (2) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の結果	7
第1節 調査結果の概要	7
第2節 遺 構	9
第3節 遺 物	30
第4章 総 括	67

挿図目次

第1図	年次別の調査区	1	第30図	第5次調査遺物図(土器4)	34
第2図	第3次調査検出の祠跡推定遺構	2	第31図	第5次調査遺物図(土器5)	35
第3図	遺跡の位置	3	第32図	第5次調査遺物図(土器6)	36
第4図	周辺の遺跡	6	第33図	第5次調査遺物図(土器7)	37
第5図	グリッド割付図	7	第34図	第5次調査遺物図(土器8)	38
第6図	検出遺構概略図	8	第35図	第6次調査遺物図(土器1)	39
第7図	建物遺構図1	10	第36図	第6次調査遺物図(土器2)	40
第8図	建物遺構図2	11	第37図	第6次調査遺物図(土器3)	41
第9図	建物遺構図3	12	第38図	第5次調査遺物図(木製品1)	43
第10図	建物遺構図4	13	第39図	第5次調査遺物図(木製品2)	44
第11図	建物遺構図5	14	第40図	第5次調査遺物図(木製品3)	45
第12図	第5次調査遺構図(井戸1)	15	第41図	第5次調査遺物図(木製品4)	46
第13図	第5次調査遺構図(井戸2)	16	第42図	第5次調査遺物図(木製品5)	47
第14図	第5次調査遺構図(井戸3)	17	第43図	第5次調査遺物図(木製品6)	48
第15図	第5次調査遺構図(土坑1)	18	第44図	第5次調査遺物図(木製品7)	49
第16図	第5次調査遺構図(土坑2)	19	第45図	第5次調査遺物図(木製品8)	50
第17図	第5次調査遺構図(土坑3)	20	第46図	第6次調査遺物図(木製品1)	51
第18図	第5次調査遺構図(土坑4)	21	第47図	第6次調査遺物図(木製品2)	52
第19図	第5次調査遺構図(土坑5)	22	第48図	第6次調査遺物図(木製品3)	53
第20図	第5次調査遺構図(溝1)	23	第49図	第6次調査遺物図(木製品4)	54
第21図	第5次調査遺構図(溝2)	24	第50図	第5・6次調査遺物図(石製品1)	55
第22図	第5次調査遺構図(左:SD02土層断面位置 右:橋脚遺構)	25	第51図	第5・6次調査遺物図(石製品2)	56
第23図	第5次調査遺構図(水路調査区)	26	第52図	第5・6次調査遺物図(石製品3)	57
第24図	第6次調査遺構図(井戸・土坑1)	27	第53図	第5・6次調査遺物図(石製品4)	58
第25図	第6次調査遺構図(土坑2)	28	第54図	第5・6次調査遺物図(金属製品)	59
第26図	第6次調査遺構図(溝)	29	第55図	第6次調査遺物図(銭貨拓影)	60
第27図	第5次調査遺物図(土器1)	31			
第28図	第5次調査遺物図(土器2)	32	附図	白江梯川遺跡1994・95年度調査区遺構図	
第29図	第5次調査遺物図(土器3)	33			

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧	4	第5表	石製品一覧	65・66
第2表	建物一覧	61	第6表	金属製品一覧	66
第3表	土器一覧	61~64	第7表	銭貨一覧	66
第4表	木製品一覧	64・65			

図版目次

図版1	調査地	図版19	遺構 第6次(1995(平成7)年度)調査
図版2	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版20	遺構 第6次(1995(平成7)年度)調査
図版3	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版21	遺構 第6次(1995(平成7)年度)調査
図版4	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版22	遺構 第6次(1995(平成7)年度)調査
図版5	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版23	遺構 第6次(1995(平成7)年度)調査
図版6	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版24	遺物 第5次調査 土器類
図版7	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版25	遺物 第5次調査 土器類
図版8	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版26	遺物 第5次調査 土器類
図版9	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版27	遺物 第5次調査 土器類
図版10	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版28	遺物 第5・6次調査 土器類
図版11	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版29	遺物 第6次調査 土器類
図版12	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版30	遺物 第5次調査 木製品
図版13	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版31	遺物 第5次調査 木製品
図版14	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版32	遺物 第5・6次調査 木製品
図版15	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版33	遺物 第5・6次調査 石製品
図版16	遺構 第5次(1994(平成6)年度)調査	図版34	遺物 第5・6次調査 石製品
図版17	遺構 第6次(1995(平成7)年度)調査	図版35	遺物 第5・6次調査 石製品
図版18	遺構 第6次(1995(平成7)年度)調査	図版36	遺物 第5・6次調査 金属製品など

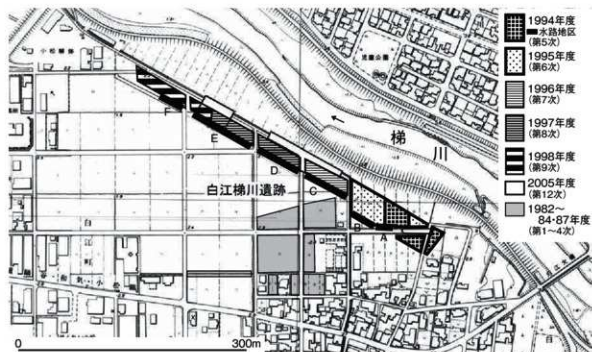
第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

本書で報告する白江梯川遺跡の発掘調査は梯川河川改修に係るもので、同改修事に伴う報告書としては、平成7（1995）年に刊行された平面梯川遺跡1に続くものである。ただし例言でも触れたように、本遺跡では石川県農林水産部耕地整備課施行の県営公害防除特別土地改良事業梯川流域地区白江西部工区に係る第1～4次調査を、石川県立埋蔵文化財センターが昭和57～59（1982～84）年、昭和62（1987）年に実施しているため、今回の平成6・7（1994・95）年度分については、第5・6次調査として扱った（第1図）。なお、梯川河川改修関連の発掘調査は、平成18（2006）年度の第13次分までが実施されている。

梯川流域の洪水は主に梅雨前線や台風に伴う豪雨が原因であり、古くは昭和8（1933）年7月25日の台風による浸水家屋1,549戸、橋梁流出32橋、昭和34（1959）年8月14日の台風7号による浸水家屋390戸、橋梁流出9橋の氾濫被害等が挙げられる。その後も治水と水害が交互に繰り返されたが、昭和43（1968）年8月28日の秋雨前線により支流である八丁川及び鍋谷川の堤防が決壊し多大な被害を受けたことを契機として、梯川の抜本的な河川改修の必要性が高まり、堤防の新設及び拡築、河道の掘削による河積の拡大、橋梁の付け替え等が順次進められている。

今回の調査箇所はいずれも梯川左岸の堤防新設に伴うもので、第5次（94年度）は築堤部となる面調査区（Ⅰ～Ⅲ区）と堤防南側に設置される排水路部分の線調査区（A～F区）、第6次（95年度）は前年度Ⅲ区の両側築堤部を東区及び西区に設定し調査を進めた（第5図）。なお、平成元（1988）年～9（1997）年度における石川県内の建設省関係事業に係る埋蔵文化財発掘調査は、石川県教育委員会が社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施したものである。



第1図 年次別の調査区

第2節 調査の経過

【第1～4次調査】

県営公害防除特別土地改良事業に伴い8,160㎡が調査されている。弥生時代からの遺構、遺物も認められるが14～15世紀を一つの盛期とし、中でも第3次調査で確認された祠跡推定遺構が注目される（第2図）。一辺3m弱の方形台部の四周を不定形の落ち込みで囲んだ特異な遺構で、落ち込み内からは多数の円礫に交じって三体の懸仏（十一



第2図 第3次調査検出の祠跡推定遺構

面観音菩薩座像一体、如来座像二体）がみついている。懸仏は中央に建てられた祠の中に納められ信仰の対象とされたのであろう。中世集落内の宗教活動を示す貴重な事例である。

【第5次調査】

調査区東端のI区の大半が河川跡であり、また、C・E・Fの各調査区でも幅30m以上の河川跡が検出されている。遺跡はこれらによって大きく区切られ、主にII～B区では中世、D区では古墳時代前期及び中世、E区西部で平安時代後期を中心とした遺構・遺物が確認されている。

II・III区では掘立柱建物8棟の他、井戸5基、土坑多数が認められた。また、III区西側に位置する集落域を区切る南北溝の溝底では橋脚を想定させるような柱穴群が検出され注目される。

なお、分布調査ではIII区付近で下層面の存在が指摘されていたが遺物層は確認されず、下層位で採取した土壌の分析からイネ科（栽培種）の植物珪酸体が認められたが遺存度が不良であり、水田土壌との確定には至らなかった。

【第6次調査】

遺構面は1面で中世遺構のほとんどは東区に集中する。基本層位は①盛土、②灰色粘土（旧耕土）、③淡灰色粘土、④地山で、遺物は③・④層の境に比較的多くみられた。昨年度調査区脇で検出された井戸（SE01）は、地表面から約2.4m下で湧水層を確認している。井戸側はみられないが下方部分は円形に掘り込まれており、曲物枠が抜かれた可能性もある。

西区に中世遺構はみられない。梯川寄りの北側約1/3は河川跡の可能性が高く、梯川に向かって緩やかに傾斜する落ち込みを確認している、その南側にはハザ穴と思われる柱穴がコの字状に並ぶ。明治21年の地籍図によると調査区内には数本の道が描かれており、その道沿いに並んで立てられていた可能性がある。また、調査区の西及び北端には近世末～近代にかけての溝が認められ、陶磁器類をはじめ多量の本製品が出土している。水田脇の水路であると同時に日常品の廃棄場所でもあったようであり、下駄類が最も目立っている。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

白江梯川遺跡は、小松市白江町地内の梯川左岸に位置する。小松市は県南西部に位置し、西は日本海に臨み、南東に霊峰白山を仰ぐ東西21.7km、南北32km、面積371.13km²の市である。市内を流れる梯川は、白山山系大日山連峰の鈴ヶ岳に大杉谷川として端を発し、山間部を北流して郷谷川と合流したのち梯川となり、市内北部で西流し、本遺跡の上流・下流で北から流れ込む鍋谷川・八丁川と、河口付近で木場潟から流れ出る前川と合流して日本海に注ぐ。全長約42km、流域面積約271km²の一級河川である。度々氾濫して流路を変え、その都度形成された自然堤防が微高地となって周辺に点在している。

遺跡が立地する小松平野は、県中部から南部の沿岸部に広がる加賀平野の南を構成する潟埋積平野である。縄文時代前期の海進によって生じた入江や潟が、弥生時代末まで続く海退によって外海と切り離されて湖沼化し、埋積して平野部が形成された。加賀三湖と称される今江潟・柴山潟・木場潟は、その湖沼の名残である。また、同じころ海岸部に砂丘が形成されている。梯川附近を境

に南では、小松市街が置かれている微高地と月津台地によって平野部が東西に分断されており、木場潟は東側に、今江潟・柴山潟は西側に位置する。梯川附近より北は、小松平野から手取川扇状地へと加賀平野が広がり、小規模な微高地が点在する地形をみせる。小松平野の東部から南東部にかけては、八幡台地から能美丘陵、そして白山連峰へと連なる山岳地帯が広がる。

現在は加賀三湖のうち、干拓によって柴山潟の北部と今江潟は姿を消し、木場潟もかつての姿よりかなり規模を縮小している。木場潟西岸の平野部を北陸本線と国道8号線がほぼ並行して走り、東部の丘陵上を小松バイパス（国道8号線）と加賀産業道路が、海岸沿いの砂丘上を北陸自動車道が南北に走る。微高地や砂丘・台地上など高台を中心に住宅地が築かれ、その周辺に広がる低地は水田として利用されている。



第3図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

小松市の歴史は後期旧石器時代に始まるが、本遺跡周辺では当該時期の遺跡は確認されていない。最も近くの遺跡としては、約5km北東に位置する八里向山遺跡が知られ、石刃や尖頭器・ナイフ形石器などが出土している。縄文時代もまた、梯川右岸の一針遺跡(5)・横地遺跡(16)・南野台遺跡(38)など数遺跡で遺物が確認されているが、いずれも散布地であり詳細な時期等は不明である。

弥生時代中期になると、本遺跡の約2km南西に位置する八日市地方遺跡を中心に集落が築かれ、中

期後半の水場遺構を検出した大長野A遺跡(51)のほか、松梁遺跡(43)、千代オオキダ遺跡(10)や本遺跡でも遺物が確認されている。本遺跡周辺で遺跡数の増加が見られるのは、弥生時代後期以降のことである。代表的な遺跡として、後期前半の遺構から青銅器土製鋤型外枠や鉄滓が出土した一針B遺跡(6)、後期中葉の掘立柱建物など多くの建物を検出した平面梯川遺跡(2)、後期～終末期の平地式建物の炉跡から鉄片が出土した千代・能美遺跡(9)などがある。一針B遺跡では古墳時代後半まで断続的に鍛冶作業が行われ、千代・能美遺跡では古墳時代前期の首長居館と考えられる施設群や、剣形・舟形木製品など祭祀的色彩の強い遺物を廃棄した導水施設などが検出されており、弥生時代後期から古墳時代にかけて本遺跡周辺では、青銅器・鉄器生産を掌握した階層の高い集落が営まれたと考えられる。他にも、白江念仏堂遺跡(23)・漆町遺跡(22)・打越遺跡(24)・佐々木遺跡(21)・佐々木ノテウラ遺跡(17)・佐々木アサバタケ遺跡(18)・千代オオキダ遺跡(10)・荒木田遺跡(39)など多くの遺跡が存在し、中世までの遺構・遺物が確認されている。主となる時期は遺跡ごとに異なるが、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代を中心とする遺跡が多いのである。散発的に遺物が見られるだけの時期も存在するが、少なくとも周辺地域で継続した生活が営まれていたと推測される。古墳時代には他にも、千代オオキダ遺跡(10)で前期の方墳が確認されている。また本遺跡の南東に位置する能美丘陵では、古府横穴(37)・八幡大塚古墳(26)・八幡行者塚古墳(27)・輪生1号墳(32)・釜谷古墳(33)などがみられる。後期には須恵器生産が開始され、木場湧東部の丘陵地に広がる南加賀古窯群では、6世紀初め頃から平安時代中頃まで操業された。本遺跡周辺では若杉オソボ山1号窯跡(30)が確認されている。

823年3月に加賀国が越前国から立国し、同年6月に江沼郡から能美郡が分立して以降、本遺跡周辺は加賀国能美郡に属する。国府は野身郷に置かれ、現古府町附近に比定されている。また奈良時代に江沼郡司であった地方豪族財部氏が、平安時代初期には能美郡司、平安時代後期には在庁官人の地位を得ていたことが文献に表れている。佐々木遺跡(21)は8世紀初頭～中葉の欄列と溝で区画され

No	遺跡番号	名 称	所 在 地	時 代	種別	No	遺跡番号	名 称	所 在 地	時 代	種別
1	03158	土小松遺跡	小松市土小松町	平安	散布地	30	03184	若杉オソボ山1号窯跡	小松市若杉町	古墳後期	窯跡
2	03159	平面梯川遺跡	小松市平河町	弥生	集落跡	31	03185	伊太寺跡	小松市八幡町	古墳～中世	寺跡
3	03160	江口梯川遺跡	小松市白江町	弥生・中世	集落跡	32	03186	輪生1号墳	小松市吉竹町	古墳	古墳
4	03161	江口集落	小松市白江町	室町	集落跡	33	03187	釜谷古墳	小松市吉竹町	古墳	古墳
5	03162	一針遺跡	小松市一針町	縄文	散布地	34	03216	十九堂山遺跡	小松市古府町	平安・中世	寺瓦跡
6		一針B遺跡	小松市一針町	弥生～中世	集落跡	35	03217	十九堂山中世墓群	小松市古府町	中世	塚墓
7		一針C遺跡	小松市一針町	弥生～中世	集落跡	36	03220	古府シマ遺跡	小松市古府町	平安・中世	散布地
8	03163	定地坊跡	小松市能美町	室町	寺瓦跡	37	03221	古府横穴	小松市古府町	古墳	横穴墓
9	03164	千代能美遺跡	小松市千代町・能美町	弥生～中世	集落跡	38	03222	南野台遺跡	小松市古府町	縄文～中世	散布地
10	03165	千代オオキダ遺跡	小松市千代町	縄文～中世	集落跡	29	03234	荒木田遺跡	小松市荒木田町	弥生～中世	散布地
11	03166	古府のまら遺跡	小松市古府町・千代町	古墳前期～平安	散布地	40	03236	大谷口遺跡	小松市輪生町	弥生後期	散布地
12	03167	小野町遺跡	小松市小野町	古墳	集落跡	41	03237	静海遺跡	小松市西静海町	弥生～古墳	散布地
13	03168	千代城跡	小松市千代町	室町	城跡	42	03238	嵐山玉島遺跡	小松市輪生町	古墳前期	集落跡
14	03169	古府遺跡	小松市古府町	平安～中世	集落跡	43	03259	松梁遺跡	小松市松梁町・新川町・大丸町	弥生～中世	散布地
15	03170	フンドシ遺跡	小松市古府町	平安	散布地	44	03300	中ノ江遺跡	小松市御田町・能美市小江町	古墳	散布地
16	03171	静地遺跡	小松市千代町	縄文後期	散布地	45	03301	長田遺跡	小松市長田町	弥生末～古墳	散布地
17	03172	佐々木ノテウラ遺跡	小松市佐々木町	弥生～中世	集落跡	46	03302	高堂遺跡	小松市高堂町・能美市大野野町	弥生～中世	集落跡
18	03173	佐々木アサバタケ遺跡	小松市佐々木町	弥生～中世	集落跡	47	03303	高堂四方遺跡	小松市高堂町	弥生	散布地
19	03174	千代本村遺跡	小松市千代町	古墳	散布地	48	03304	千代デジロA遺跡	小松市千代町・能美市小田町	弥生・古墳～中世	集落跡
20	03175	千代メダ遺跡	小松市メダ町	古墳～平安	散布地	49	03305	千代デジロB遺跡	小松市千代町・能美市小田町	弥生・古墳～平安	集落跡
21	03176	佐々木遺跡	小松市佐々木町	平安	集落跡	50	03306	千代デジロC遺跡	小松市千代町・能美市大野野町	古墳～平安	集落跡
22	03177	漆町遺跡	小松市漆町・白江町・若杉町	弥生～中世	集落跡	51	11001	大長野A遺跡	能美市大長野町	縄文・弥生・中世	集落跡
23	03178	江口念仏堂遺跡	小松市白江町	弥生～中世	集落跡	52	11002	大長野B遺跡	能美市大長野町	不詳	散布地
24	03179	打越遺跡	小松市織町	弥生～中世	集落跡	56	11003	牛島宮の鳥遺跡	能美市大長野町・牛島町	平安	集落跡
25	03180	若杉古墳	小松市若杉町	江戸	塚墓	53	11009	小長野遺跡	能美市小長野町	不詳	散布地
26	03181	八幡大塚古墳	小松市八幡町	古墳	古墳	54	11010	小長野B遺跡	能美市小長野町	弥生末	散布地
27	03182-1	八幡行者塚古墳	小松市八幡町	古墳	古墳	55		小長野C遺跡	能美市小長野町	古代	集落跡
28	03182-2	大塚2号墳	小松市八幡町	古墳	古墳	57	11007	牛島ウハシ遺跡	能美市牛島町	縄文～中世	散布地
29	03183	吉竹遺跡	小松市吉竹町	弥生・古墳	集落跡	58	11026	佐野A遺跡	能美市佐野町	弥生・古墳	散布地

第1表 周辺の遺跡一覧

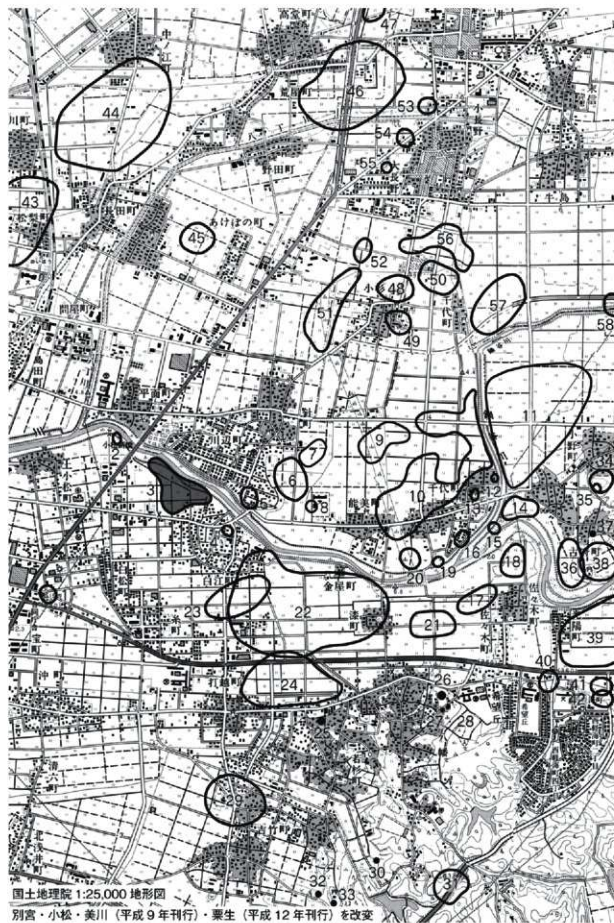
た建物群や、精錬鍛冶関連の土坑を検出し、11世紀末まで断続的に建物群が構築されていた遺跡である。「野身郷」・「財部寺」と書かれた墨書土器が出土し、財部氏との関連性が窺える。東に隣接する佐々木ノテウラ遺跡(17)では、10世紀前半と12世紀の柵列や溝で区画された建物群が検出され、佐々木アサバタケ遺跡(18)からは12世紀の掘立柱建物・瓦・初期貿易陶磁器などが出土し、国府との関連が指摘されている。西に隣接する漆町遺跡(22)からは、10世紀中頃の「庄」と書かれた墨書土器が出土している。浄水寺跡(31)は9世紀後半頃成立し、貿易陶磁器や密教仏具などの金属製品、大量の墨書土器などが出土し、有力な在庁官人の庇護を受けていたと考えられている。また十九堂山遺跡(34)は、加賀国分寺に比定されている。

中世になると梯川中流域では、加賀斎藤系林氏の庶流板津氏の一族が白江保(白江庄)を開発して土着し、白江氏を名乗っている。次第に武士団を形成し、鎌倉時代前期には国衙在庁の介を継承している。白江庄は後に北白江庄・南白江庄・南白江新庄の3庄に分かれ、当遺跡が属すると考えられる南白江庄は、1268年に延暦寺に寄進され、後に天台宗妙法院門跡が管領し、兼帯する円音寺に付属する。室町時代には南白江庄の一部が幕府奉公衆西郡氏の知行地となるが、在地代官として白江氏の名前が確認されている。この時期の遺跡には、12世紀後半～13世紀初頭の掘立柱建物や井戸と、それらを囲む区画溝が整然と配置された佐々木ノテウラ遺跡(17)や、13世紀後半～15世紀中頃の掘立柱建物・井戸などが多く検出した佐々木アサバタケ遺跡(18)、同じく15世紀頃まで集落が営まれ、多数の掘立柱建物や井戸を検出した漆町遺跡(22)、打越遺跡(24)、荒木田遺跡(39)などがみられる。

近世の遺跡では、若杉窯跡(25)がある。若杉窯は1805年から陶器生産が行われていたが、1811年に磁器生産が開始され、1816年に郡奉行の直接支配下に置かれた後は、藩窯として再興九谷の生産を行った。藩の殖産興業政策と南に位置する花坂山の豊富な陶石を背景に、加賀藩で最初に量産化に成功した窯である。後に八幡村へ移転し、1875年に廃窯となった。現在でも周辺には多くの窯元が存在し、若杉町・八幡・吉竹町などでは、九谷焼素地の90%以上を生産し、また成形や上絵付けなども行われ、一大窯業地として石川県の代表的な伝統工芸品「九谷焼」の生産基盤となっている。

引用・参考文献

- | | | |
|-----------------------|------|---|
| 石川県 | 1985 | 『土地分類基本調査 小松(石川県)』 |
| 石川県 | 1985 | 『土地分類基本調査 鶴来(石川県)』 |
| 垣内光次郎 ^{11a)} | 1988 | 『佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター |
| 垣内光次郎 ^{11a)} | 2000 | 『小松市平面梯川遺跡 第2・3次発掘調査報告書(財)石川県埋蔵文化財センター』 |
| 柿田祐司 | 2008 | 『浄水寺跡(財)石川県埋蔵文化財センター』 |
| 株式会社クボタ | 1992 | 『アーバンクボタ No.31』 |
| 北野博司 ^{11b)} | 1986 | 『佐々木ノテウラ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター |
| 北野博司 ^{11b)} | 1992 | 『千代』石川県立埋蔵文化財センター |
| 小松市教育委員会 | 2000 | 『市制60周年記念事業 埋蔵文化財特別展 こまつ二万年の歩み』 |
| 小松市立博物館 | 2005 | 『平成17年度特別展 開窯二百年記念展～今に繋がる再興九谷の源流～若杉』 |
| 坂下義規 | 2004 | 『佐々木遺跡』石川県立埋蔵文化財センター |
| 津田隆志 | 2003 | 『千代・能美遺跡』小松市教育委員会 |
| 浜崎崎司 ^{11c)} | 1995 | 『平面梯川遺跡Ⅰ』(社)石川県埋蔵文化財保存協会 |
| 久田正弘 ^{11d)} | 1989 | 『漆町遺跡Ⅳ』石川県立埋蔵文化財センター |
| 福海貴子 ^{11e)} | 2003 | 『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会 |
| 平凡社 | 1991 | 『石川県の地名』日本歴史地名体系17 |
| 荒木麻理子 ^{11f)} | 2002 | 『一針B遺跡・一針C遺跡(財)石川県埋蔵文化財センター』 |



第4図 周辺の遺跡

第3章 調査の結果

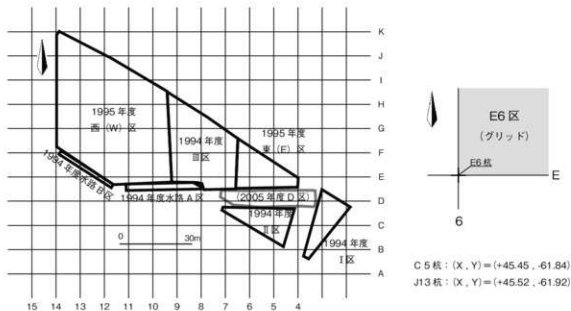
第1節 調査結果の概要

白江梯川遺跡の梯川改修に係る一連の調査範囲には、大きく見て3箇所の中世の居住域が認められる(第6図上)。この報告書では最も上流寄りの面調査区(1994年度水路A・B区を加えたもの)で検出された中世居住域にかかる遺構・遺物を主に取り扱うことになるが、1994年度水路C～F調査区の概要と総括については、次冊以降報告の隣接の面調査区に接取させるものとする。

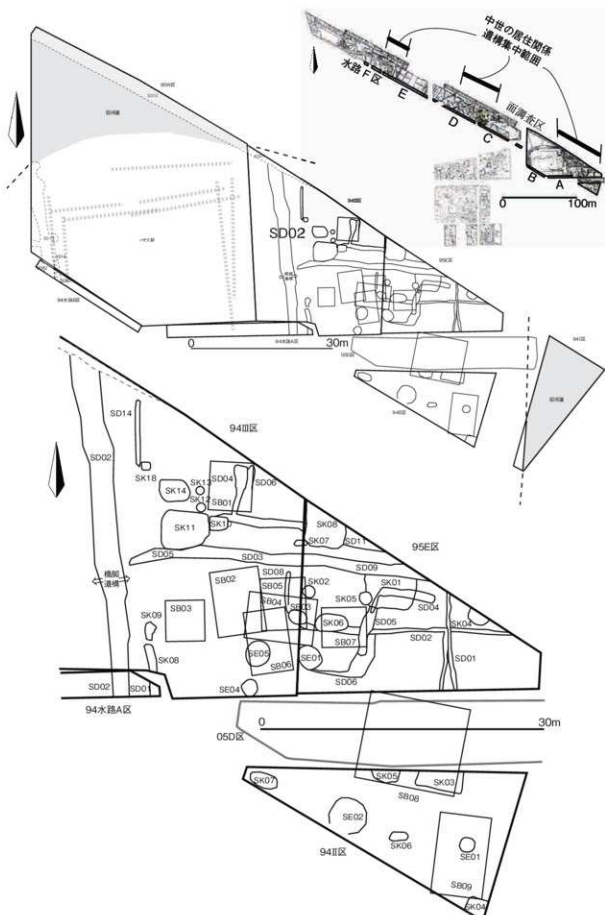
中世の居住遺構の空白域は当時から水田域や河川氾濫原などの低地であったものと考えられ、一見して認識できる居住域は微高地への集住の結果であろう。なお、今回報告の範囲においては、周辺のいくつかの地点にみられる古代以前の文化層(「中層」「下層」など)は確認されなかったが、1994年度Ⅲ区の遺構(SK10)壁面では下層位に土壌化層が検出されており、イネのプラントオパールが若干含まれていた。

面調査区における検出面は黄灰～青灰色の砂質シルト～粘土で、標高は東寄りで2.17m・北西部で1.87m前後をそれぞれ測る。東半部(1994年度Ⅱ・Ⅲ区、1995年度東区)に12～15世紀頃の柱穴、井戸・土坑、溝が集中しており、西半部(1995年度西区)では居住痕跡が希薄である。遺構の濃淡を画することが考えられる南北方向の溝(1994年度Ⅲ区SD02)には、検出範囲の中程の溝底に柱穴群が検出されており、橋が架かっていたものとみられる。

居住域では建物跡、井戸・土坑、溝などが検出された。当遺跡における過去の調査と同様、建物跡は掘立柱式で総柱・備柱が認められるが、復元には難を伴うものが多い。柱穴の検出状況が良好でないためか、建物自体の構造によるものであるかも含めて建物構造については課題が多いが、報告に際して周辺の中世溝などの走向に即した建物の抽出を心掛けた。大型の土坑には円筒形のものと同箱型のものがある。井戸には側材を抜き取られたものが多いため、筒形の土坑には一部に井戸との峻別が困難なものがある。比較的浅い箱形の土坑にはいわゆる「竪穴状遺構」が散見される。



第5図 グリッド割付図



第6図 検出遺構概略図

遺物には居住域の井戸・溝などから出土した12～15世紀頃のもの、近世末～近代頃の溝から出土したものがある。前者には特筆すべきものとして、灯油臭を発散する灯明皿(45)が含まれる。後者は再興九谷と漆器類を中心とした廃棄品であるが、木札(W74)はハサ木穴群とともに遠くない過去の水田景観や稲作事情を彷彿とさせる。中世以外の時代のものには、弥生～古墳時代の土器類など、平安時代の瓦片(80)・石帯片(S20)などがあるが、これらは調査地への流入品と考えられるものである。

現地調査に際しては、第5図に示すように日本測地系に基づいた10mグリッドを設定した。

第2節 遺 構

調査の結果、建物9、井戸6、土坑約20、溝約20などの遺構が検出された。

1. 建物

S B 4501

94Ⅲ区北東部F 8グリッドに位置する。長軸がN-3°-Eを指す2(3)間(5.13m)×2間(4.63m)の側柱建物として報告するが、柱穴形状のばらつきが大きく、柱穴の並びも良くない。周辺の柱穴も含め再検討が必要かもしれない。

S B 4502

94Ⅲ区南東部E 7～8グリッドに位置する。長軸がN-8°-Wを指す3間(7.15m)×2間(5.00m)の総柱建物。柱穴はφ20～30cmの円形で、深さ20cm程度を測る。この建物はS B 4506とは、建物間の1間×1間がほぼ重なりあい、長軸方向がほぼ一致する関係にある。つまりこの2つの建物は実は1棟である可能性がある。ここでは、現地調査時の柱穴の検出状況に鑑みて2棟として報告する。

S B 4503

94Ⅲ区南東部E 8グリッドに位置する。長軸がN-1°-Wを指す2間(4.68m)×2間(4.34m)の総柱建物。柱穴はφ20～30cmの円形で、深さ15～20cm程度を測る。柱穴が明瞭に検出され柱筋も良くとおることから、現地調査の段階から存在が予想された建物である。建物群の中では最も西に位置することになる。

S B 4504

94Ⅲ区南東部E 7～8グリッドに位置する。長軸がN-7°-Eを指す南北2間(5.12m)×東西3間(7.14m)の総柱建物。柱穴はφ20～30cmの円形で、深さ25～30cm程度を測る。

S B 4505

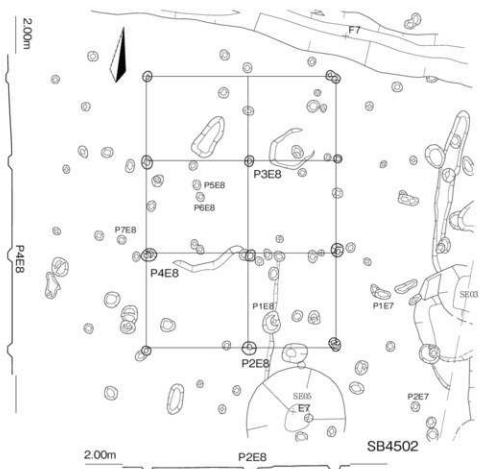
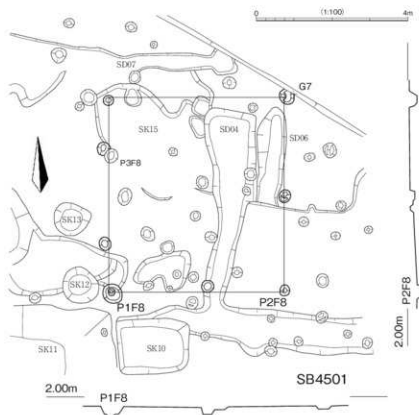
94Ⅲ区南東部～95E区E 7グリッドに位置する。長軸がN-2°-Wを指す南北2間(4.41m)×東西1間(3.90m)の側柱建物。柱穴はφ20～30cmの円形で、深さ15cm程度を測る。

S B 4506

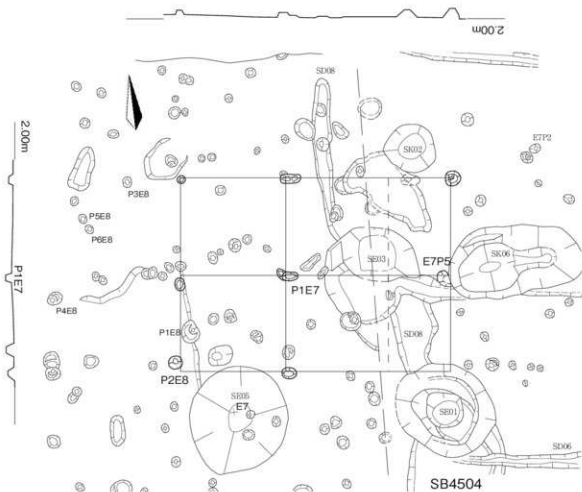
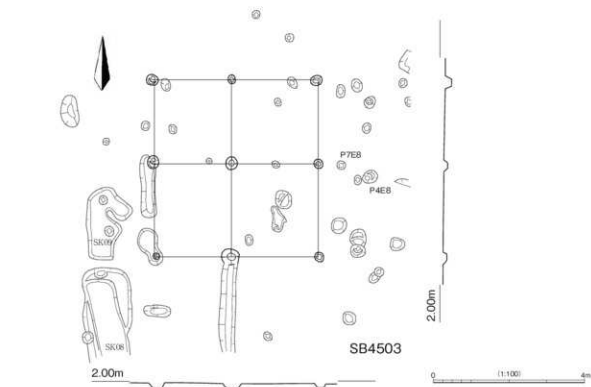
94Ⅲ区南東部E 7～8グリッドに位置する。長軸がN-8°-Wを指す3間(7.33m)×2間(4.83m)の総柱建物。柱穴はφ20～30cmの円形で、深さ15～30cm程度を測る。既述のようにS B 4502と一体の建物の可能性がある。

S B 4507

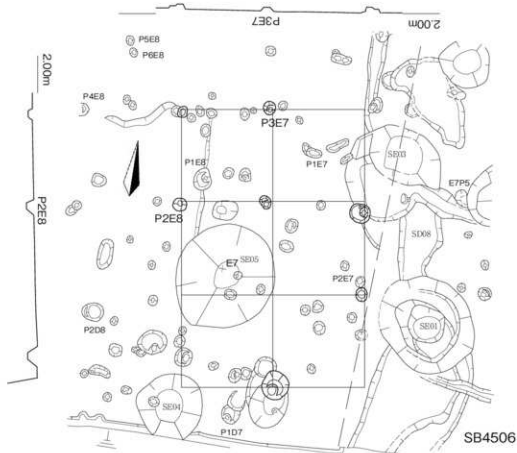
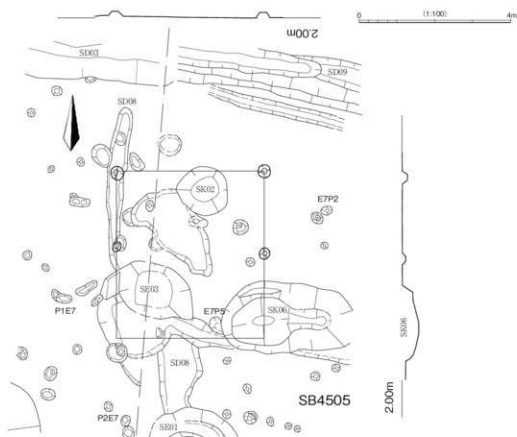
95E区～グリッドに位置する。長軸がN-1°-Wを指す南北1間(4.13m)×2間(4.80m)の側柱建物。柱穴はφ20～30cmの円形で、深さ15～30cm程度を測る。



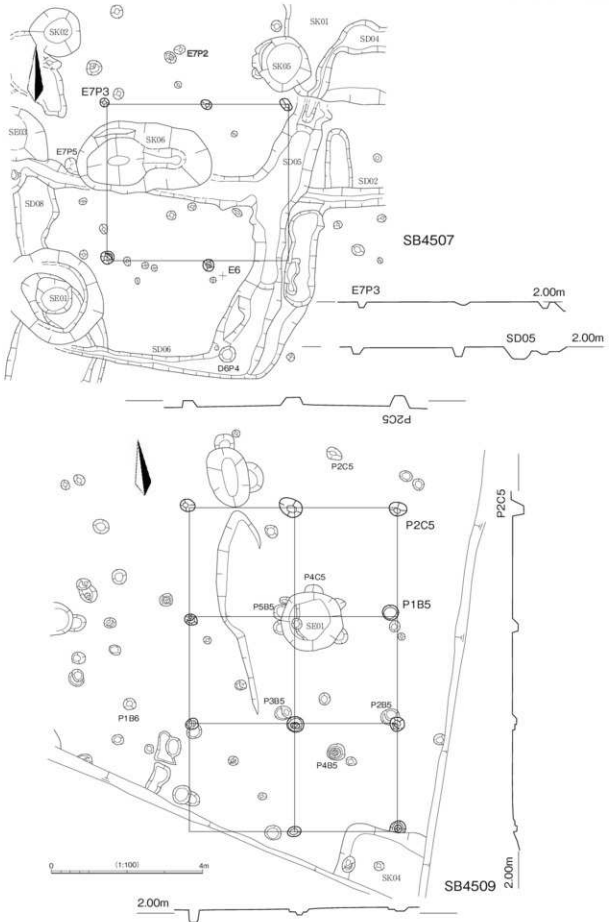
第7図 建物遺構図1



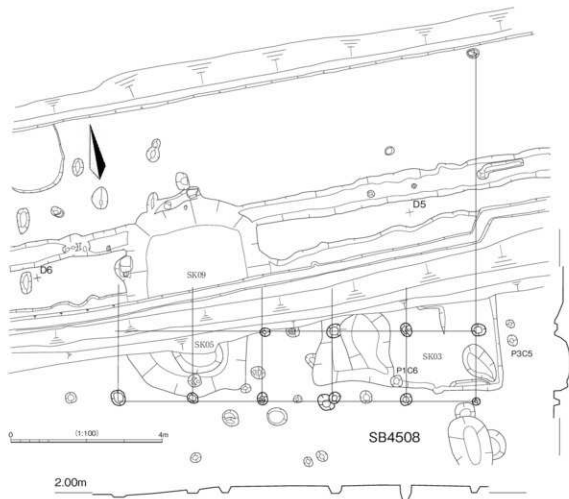
第8図 建物遺構図2



第9図 建物遺構図3



第10図 建物遺構図4



第11図 建物遺構図5

SB4508

94Ⅱ区～グリッドに位置する。N-11°-Eを指す南北1間(1.86m)以上×東西5間(9.47m)の建物で、北方に数間のびる総柱建物とみられる。柱穴はφ20～30cmの円形で、深さ40～50cm程度を測る。柱間が東西・南北ともに狭い建物である。2005年度D区にのびることが考えられるが、遺構図上明瞭ではない。竪穴状遺構SK03及び土坑SK05を切り込む柱穴がある。

SB4509

94Ⅱ区～グリッドに位置する。長軸がN-7°-Eを指す南北3間(8.56m)×東西2間(5.50m)の総柱建物。柱穴はφ20～30cmの円形で、深さ35cm程度を測る。

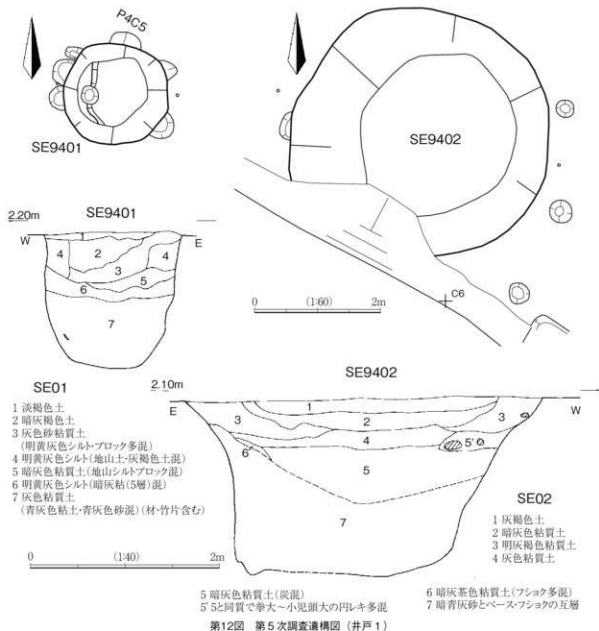
2. 井戸

SE9401

94Ⅱ区C5グリッド。直径1.7m、深さ1.4mの円筒形で、湧水は少ない。水溜の曲物側材(W9～12)、井筒の側板(W12)などが出土している。

SE9402

94Ⅱ区C6～7グリッド。直径4.2mの略円形プランで、深さ2.0mを測る大型の井戸で、夥しい湧水を見た。井戸側が抜き取られる際に大がかりな再掘削を被ったものとみられる。15世紀前半～中頃



第12図 第5次調査遺構図(井戸1)

を中心とする土器類(45~81)、木製品(W13~35)、石製品など、今回報告の中世の遺構のうち、最も多くの遺物が出土している。

SE9403

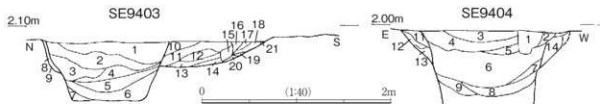
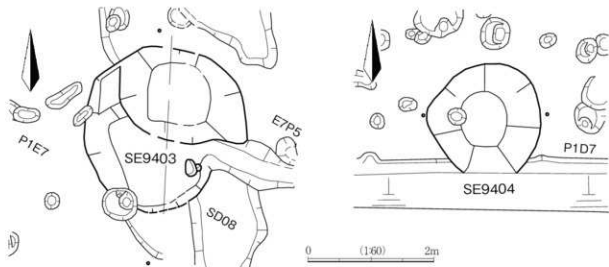
94Ⅲ区~95東区E7グリッド。1辺1.3m程度の隅円方形プランで、深さ0.8m。湧水は少ない。埋土中に骨片が認められた。他の井戸と比べて著しく浅いことから本来井戸ではない可能性が高い。

SE9404

94Ⅲ区D7~8グリッド。直径1.8mの円形プランで、横断面は漏斗形を呈し、深さ2.6m(以上)を測る。湧水があり狭い井筒内の掘削は困難であったが、曲物の井戸側(W41)が残されていたことから辛うじてその深さまで掘削を進めることができた。

SE9405

94Ⅲ区DE7~8グリッド。直径2.4mの円形プランで、横断面は漏斗形を呈し、深さ2.4mを測る。



- 1 淡褐色粘質土(砂気混じる)
- 2 褐色粘質土
- 3 灰色粘土
- 4 灰黄色粘質土
- 5 黄灰色粘土
(鉄分の混じりか黄色系に見える,しまり弱い)
- 6 暗灰色粘土
- 7 暗青灰色粘土
- 8 灰色粘土(3の残り残しの可能性あり)
- 9 淡黄色粘質砂(地山の崩れか)
- 10 黄褐色粘質土
- 11 黄灰褐色粘質土(全体に地山土混入)
- 12 灰色粘質土
- 13 淡黄灰色粘質土(下層部にうすい炭層あり)
- 14 黄灰色粘質土
- 15 12と同色
- 16 淡褐色粘質土(鉄分の含み多く,カリカ)
- 17 淡黄褐色粘質土
- 18 淡黄灰色粘質土(土器細片含む)
- 19 褐色粘質土
- 20 淡黄灰色粘質砂(地山土にやや灰色味がかかる)
- 21 地山土よりやや暗い

SE04

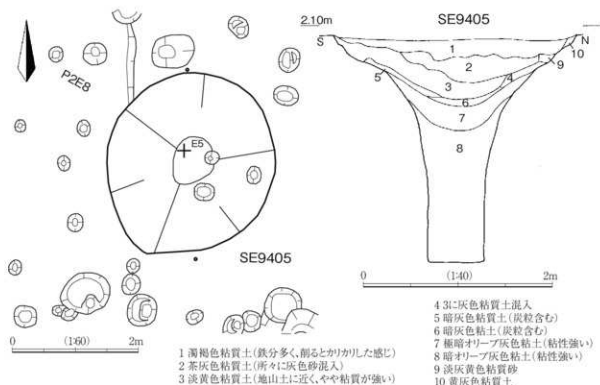
- 1 濁灰色粘質土 (pit108)
- 2 濁黄灰色粘質土 (pit108)
- 3 濁黄褐色粘質土
(最終堆積土で円形状に堆積)
- 4 灰褐色粘質砂
- 5 4より灰色強い
- 6 灰黄色粘土(炭粒少量含む)
- 7 淡灰黄色粘質土
- 8 (暗)灰色粘土
- 9 暗黄灰色粘土
- 10 暗灰褐色粘と暗青灰粘の互層で短期間の埋込みが予想される
- 11 淡灰色粘質土
- 12 灰色粘質土(地山ブロック混入)
- 13 暗灰色粘質土(炭粒含む)
- 14 淡黄色粘質砂(地山土に近い)

第13図 第5次調査遺構図(井戸2)

湧水がありSE9404と類似した遺構であるが、SE9405の方には側材が認められなかった。

S E9501

95東区D～E7グリッド。直径22mの略円形プランで、深さ24m程度。下位で夥しい湧水をみた。井戸側が抜き取られたものとみられる。14～15世紀代とみられる土器類(161～164)・漆器(W52)・石製品(S15～17)が出土した。遺構の形状・埋土・出土品といった点でSE9402との共通性が認められる。



第14図 第5次調査遺構図(井戸3)

3. 土坑

S K 9403

94Ⅱ区C5～6グリッド。東西5.4m×南北2.6m以上の長方形プランの堅穴状遺構で、深さ0.65m。南辺はN-77°-W、東辺はN-7°-E前後をそれぞれ指す。坑底は平坦で側壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中～上位にベース土塊を多量に混じえており、埋立てを思わせる。S B 4508に先行する。

S K 9404

94Ⅱ区B5グリッド。一辺2m以上の方形プランの土坑で深さ0.5m。予想される軸線はS K 9403と同様、東偏気味であろう。坑底は平坦で側壁は急角度で立ち上がる。堅穴状遺構の類とみられる。坑底のほぼ全域に炭化物の薄層が認められた。

S K 9405

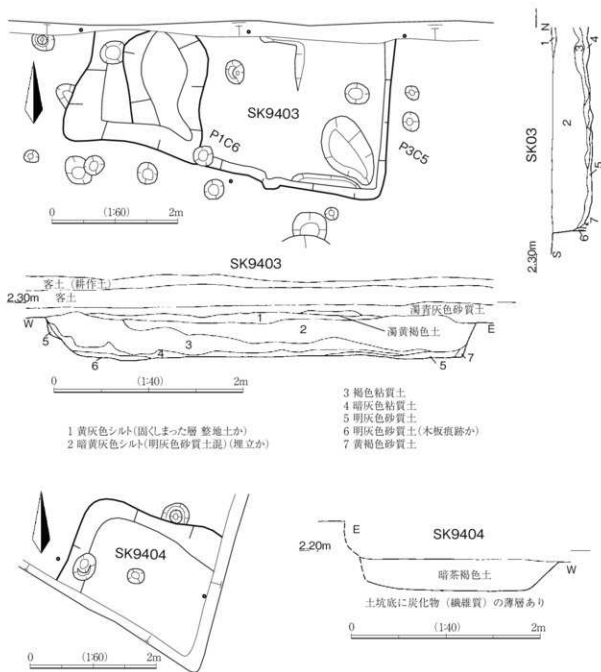
94Ⅱ区C6グリッド。2005年度D区S K 09と一連の遺構で、南北5.3m×東西3.2m隅円長方形プランの土坑で、深さ0.6～0.9mを測る。

S K 9408・09

94Ⅲ区D E 9グリッド。幅0.8～1.2m程度、深さ0.3m程度で、水路A区S D 01と一連の溝状遺構をなすもの。区画溝S D 9402とは1.5m程度の無遺構帯を空けてよく平行しており、東に比べて西層での上端縁の出入りが少ないと看取される。無遺構帯に土塁状の施設が設けられたことが想定しうのではなかろうか。

S K 9410

94Ⅲ区F 8グリッド。東西1.9m×南北1.4mの長方形プランの堅穴状遺構で、深さ0.5m。坑底は平坦で側壁はほぼ垂直に立ち上がる。プランはほぼ正方位を指向する。灰色粘質土とベース土によって



第15図 第5次調査遺構図(土坑1)

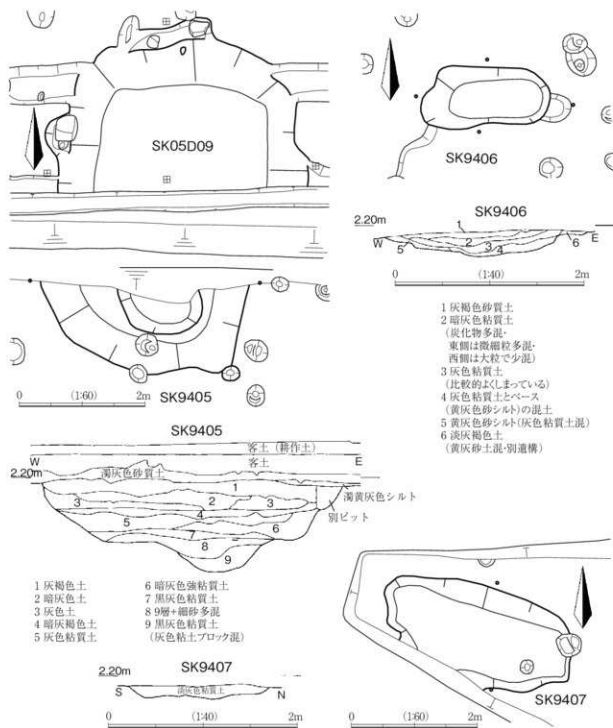
一気に埋め立てられたように観察された。

S K9411

94Ⅲ区F 8グリッド。S K9410の西に接するように検出された東西5.0m×南北4.3mの長方形プランの堅穴状遺構で、深さ0.9m。坑底はほぼ平坦で、側壁は南辺がほぼ垂直に近く、他の3辺はやや緩やかにたちあがる。S K9410と同様、プランはほぼ正方位を指向する。土坑内南寄りの埋土下位で多量の箸状木製品(W 1～8など)が発見されている。

S K9412・13

94Ⅲ区F 8グリッド中央に0.8mの間隔を空けて南北に配された円筒形土坑。ともに直径0.7m程度で、



第16図 第5次調査遺構図(土坑2)

南に位置するSK9412が深さ1.0m、北のSK9413が深さ0.7mをそれぞれ測る。

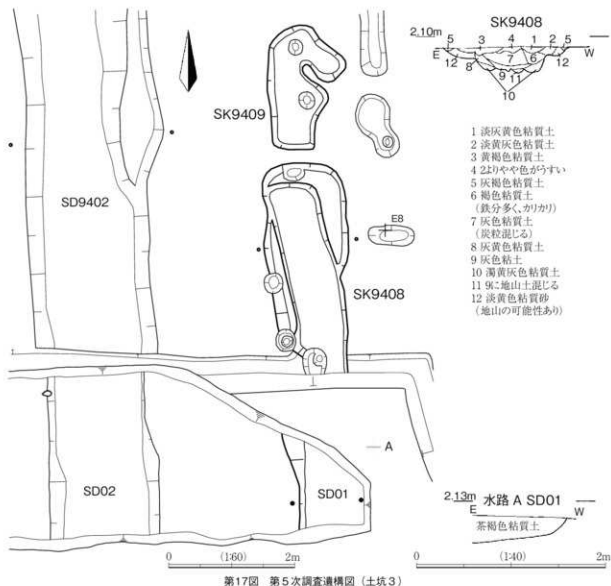
SK9418

94Ⅲ区F9グリッド。東西1.0m×南北0.8mの隅円長方形プランの筒形土坑で、深さ1.2mを測る。

SK9502

95東区E7グリッド。直径1.4mの略円形プランで横断面は逆台形を呈し、深さ0.7mを測る。

SK9504



95東区 E 5 グリッド。不整形プランで深さ0.4mを測る。S D02に先行する。

S K 9505

95東区 E 6 グリッド。直径1.5mの略円形プランで深さ0.7mを測る。

S K 9506

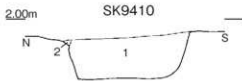
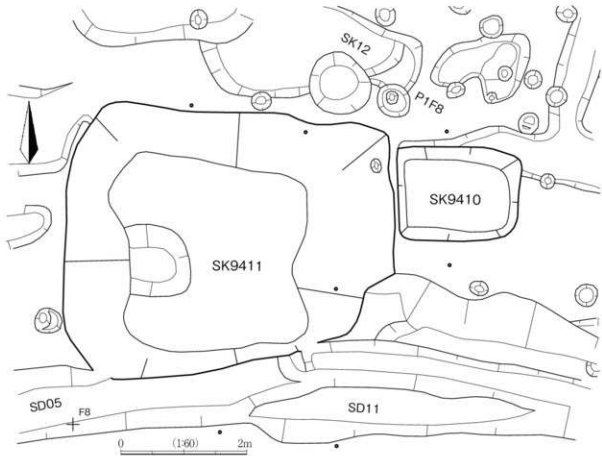
95東区 E 7 グリッド。東西3.9m・南北2.0mの長円形プランで深さ1.5mを測る。形状がやや異例に属することと、出土土器に13世紀(158)と14世紀後半～15世紀前半(156・157)の2時期が認められることから、本来は複数の土坑類が重複していた可能性がある。

S K 9507

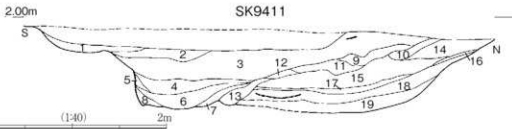
95東区 F 7 グリッド。東西1.0m以上・南北0.6mの溝状で深さ0.3mを測る。12世紀に遡る土器類のみが検出されており、本居住地における最初期の遺構であろう。

S K 9508

95東区 E～F 7 グリッド。東西4.2m・南北5.0m以上の隅円長方形プランで深さ0.4mを測る。堅穴状遺構である。S D9509に先行する。

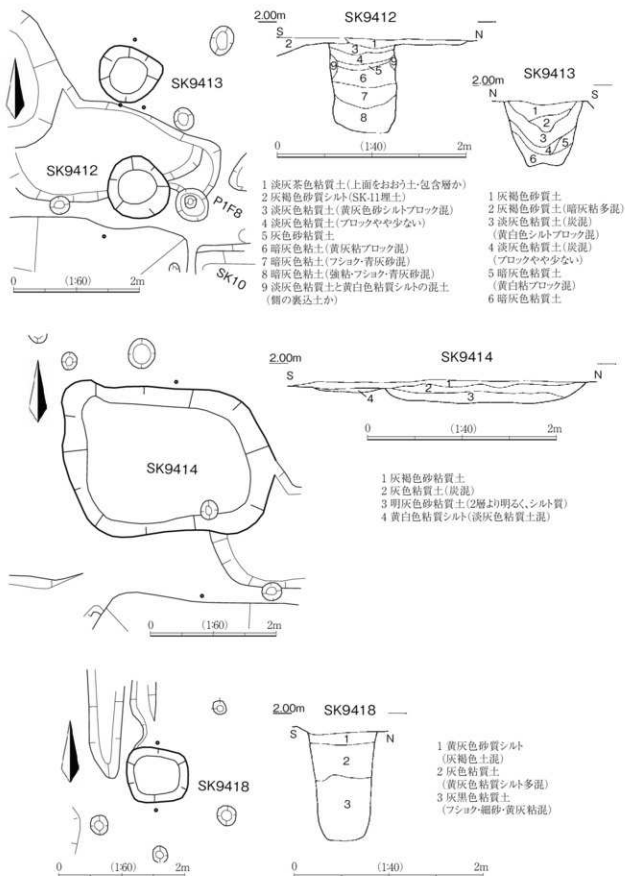


- 1 黄白色シルトと灰色粘質土の混土
(一気に埋められたものとみられる)
- 2 淡茶灰色砂粘質土

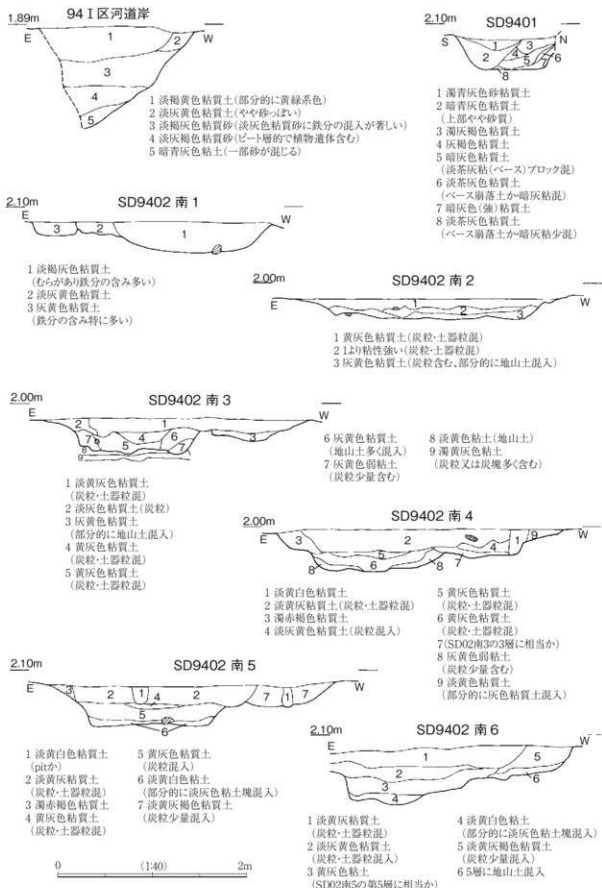


- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 灰色粘質土(SD05か) 2 黄灰色粘土 3 淡灰黄色粘土(鉄分多く、所々に砂気が混じる) 4 褐色粘土 5 42リヤや暗い 6 灰褐色粘土(箸状木器多量出土) 7 淡灰褐色粘土 8 暗褐色粘土(しどろい) 9 淡黄灰色粘土 10 淡黄色粘土 | <ul style="list-style-type: none"> 11 灰:淡灰色粘質土混じる 12 黄灰色粘質土 13 濁灰褐色粘土(まばらに淡青灰色粘土はいる) 14 濁黄褐色粘質土 15 淡灰色粘土
(鉄分多く、所々に黄色系粘土はいる) 16 灰色炭層 17 15よりやや暗い 18 暗オリーブ灰色粘土 19 濁暗オリーブ灰色粘土 |
|--|---|

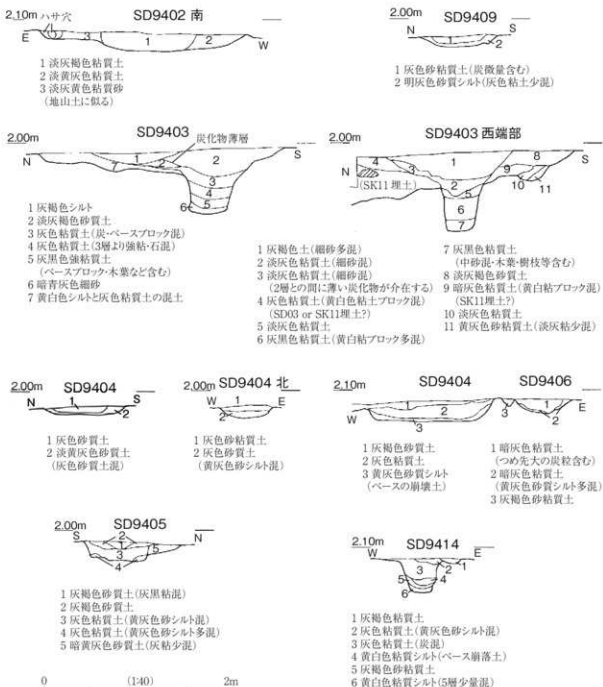
第18図 第5次調査遺構図(土坑4)



第19図 第5次調査遺構図(土坑5)



第20図 第5次調査遺構図(溝1)

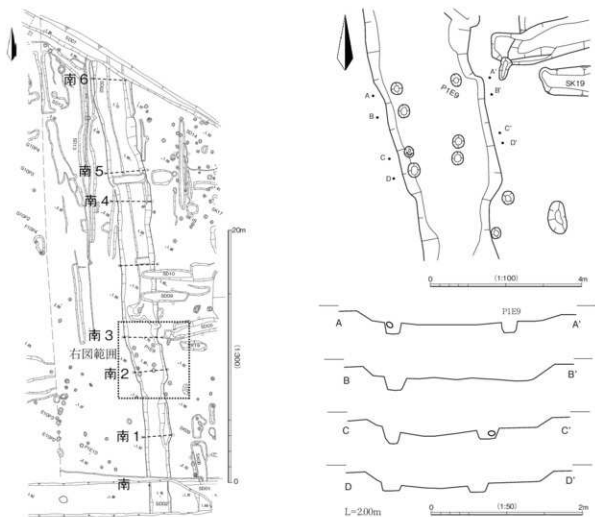


第21図 第5次調査遺構図(溝2)

4. 溝

SD9402・水路A02

94Ⅲ区を南北に縦断する溝で幅2.6～3.0m、深さ0.3～0.7m程度を測る。溝底のレベルは北端部の方が南端部よりも10cm程度低い。中世の遺構はこの溝の東側にのみ認められることから、比較的長い期間、居住域の西を限る溝であったことが考えられる。掘り方の形状及び埋土の断面観察により、大きくみて、2条の溝の重複が考えられる。古い段階の溝はやや西偏の強いもので、検出範囲の北半では



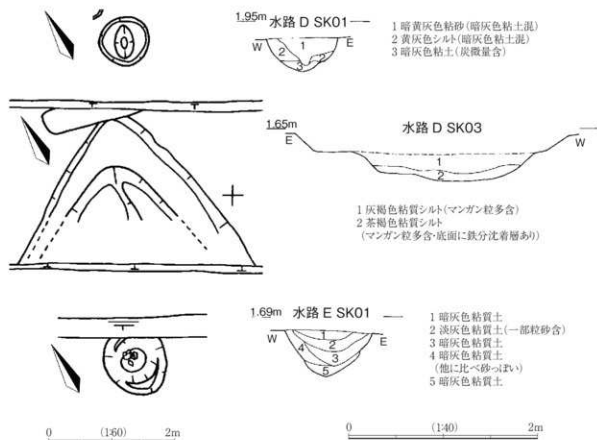
第22図 第5次調査遺構図 (左: SD02土層断面位置 右: 橋脚遺構)

居住域側の落ち肩は新しい段階の溝によって失われている。新しい段階の溝はやや正方位に近く、検出区間の中程以北で溝底に段をもって深くなる。

この溝底段から2m程度南側の溝底では柱穴群が検出されている。柱穴は直径30cm程度、溝底からの深さ15~30cm程度で、埋土に拳大の円礫を含むものがある。7穴を検出した。溝内の他の地点で柱穴が全く認められなかったことからすれば、これらは溝に付随する施設の可能性が強い。個々の柱穴は小型のものであり重厚な施設は想定し難いが、簡易な橋が設けられていたことが考えられよう。柱穴群の解析案としては、横断面(第22図右)のAラインとCライン、Bライン(東側に未検出穴があったと仮定)とDラインにそれぞれ橋桁を置く2組の橋が想定される。この想定は、組み合わせる柱穴埋土への礫の混入状況とも矛盾せず、加えて、上述のように溝について新古2段階と観察されたこととも整合的である。柱穴はすべて溝底で検出したものであるため先後関係など、遺憾ながら、不明とせざるを得ない点が多いが、以上のような理解に立てば、比較的長い期間この位置に中世の居住域の出入り口の一つが置かれていたことが考えられよう。

S D9403・05・9509

S D9402以东の居住域を南北に分ける東西方向の溝で、幅2.6~3.0m、深さ0.3~0.7m程度を測る。S D9405と9509は一連の溝、9405は同位置での掘り直しの溝であろう。西端部S D9403は浅く、S D



第23図 第5次調査遺構図(水路調査区)

9402とは連結しないことから、溝は東へ流れたものとみられる。S D9509の検出区間東端近くから、中世の渡来銭17枚(唐1・北宋15・南宋1)が一括出土している。出土土器から、最終的な埋没は15世紀前半頃と考えられる。

S D9504・05・06

鍵手状に進み、95東区の居住域を東西に分ける一連の溝群。南北溝部分のS D9505はやや東偏し、溝南東側の建物などの軸線方位に近い。出土土器から、溝は13世紀前半頃までに埋没したものとみられる。

S D9512・9401

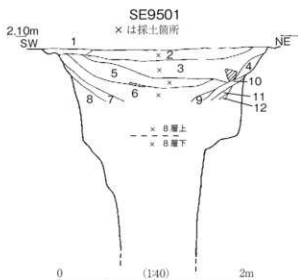
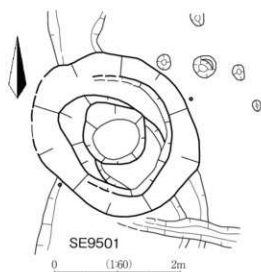
95年度西調査区の北辺にはほぼ沿ってのびる近代溝。多数の再興九谷・漆器などが出土した。北西への延長方向には、現用の水路がある。

S D9513

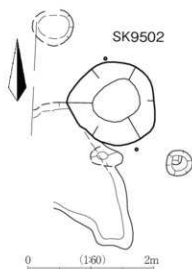
95年度西調査区の西辺脇を南から北方向に進む近代溝。多数の再興九谷・漆器などが出土した。

5. その他

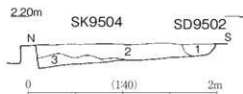
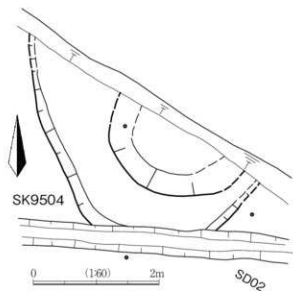
1995年度調査西区では中世の遺構は検出されていない。明瞭に検出されている柱穴列群は近世以降の所産で、SD9512・13に画されるとみられるところから、ハサ木の掘り方であろう。一見回廊状に見える部分もある。同様の例は津幡町加茂遺跡第1次1991年度調査区にみられる。コンバインの普及以前における当地の稲干し方法は、乾田においてはニオ+天日地干し、水漬きがちな湿田においては



- | | |
|------------------|--------------|
| 1 褐灰色粘質土 | 7 薄灰色粘土 |
| 2 灰褐色粘質土 | 8 暗灰色粘土 |
| 3 2よりやや灰色強い | 9 7と同層の可能性あり |
| 4 薄黄灰色粘質土(地山土混入) | 10 6に地山土混入 |
| 5 淡灰色弱粘土 | 11 淡灰色粘土 |
| 6 灰色粘土 | 12 11に地山土混入 |



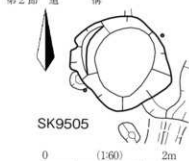
- | | |
|----------------|-----------|
| 1 明灰黄色砂質土 | 4 灰褐色粘質土 |
| 2 灰黄色砂質土(ヤヤネノ) | 5 灰黄色粘質土 |
| 3 灰色粘質土 | 6 暗灰色強粘質土 |



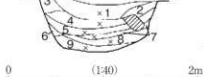
- | |
|------------|
| 1 灰黄褐色砂質土 |
| 2 灰黄褐色砂質土 |
| 3 暗灰黄褐色粘質土 |

第24図 第6次調査遺構図(井戸・土坑1)

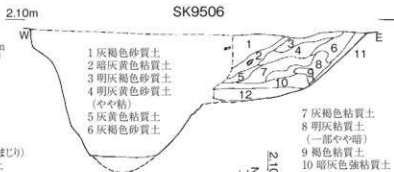
第2節 遺構



SK9505

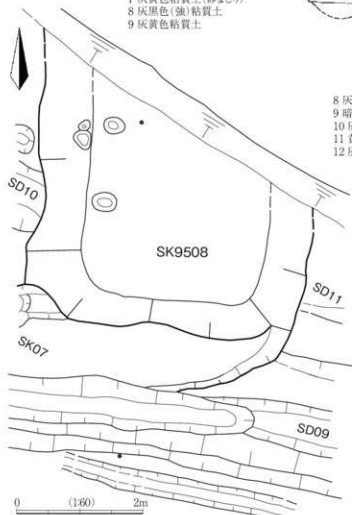


SK9506

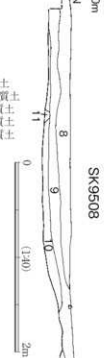


- 1 灰褐色弱粘質土(炭化物入)
- 2 黄灰色砂質土
- 3 黄灰色砂質土(2より暗い)
- 4 灰黄色弱粘質土(炭化物入)
- 5 灰黑色(強)粘質土(炭化物入)
- 6 黄灰色粘質土
- 7 灰黄色粘質土(砂まじり)
- 8 灰黑色(強)粘質土
- 9 灰黄色粘質土

- 1 灰褐色砂質土
- 2 暗灰黄色粘質土
- 3 明灰褐色砂質土
- 4 明灰黄色砂質土(やや粘)
- 5 灰黄色粘質土
- 6 灰褐色砂質土
- 7 灰褐色粘質土
- 8 明灰粘質土(一部やや暗)
- 9 褐色粘質土
- 10 暗灰色強粘質土
- 11 灰褐色砂質土
- 12 灰褐色粘質土



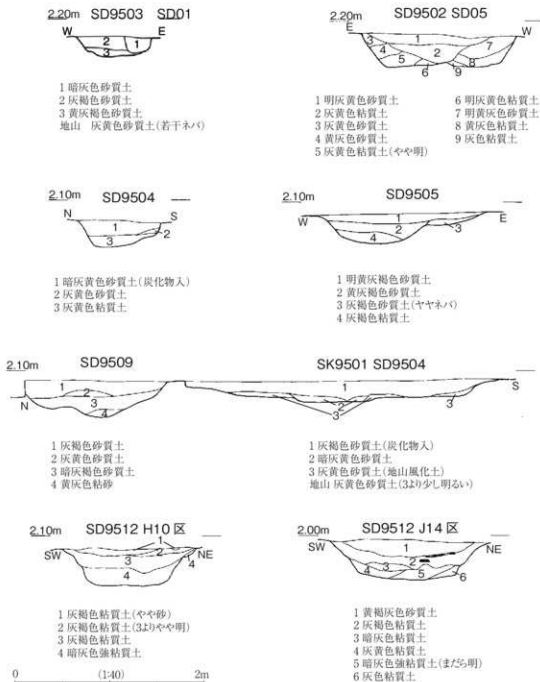
SK9508



- 8 灰褐色砂質土
- 9 暗灰黄色粘質土
- 10 灰黄色粘質土
- 11 黄灰色粘質土
- 12 灰黄色粘質土

- 1 灰黄色砂質土
- 2 黄灰色砂質土
- 3 暗灰褐色粘質土
- 4 灰褐色粘質土
- 5 灰黄褐色粘質土
- 6 暗灰色強粘質土
- 7 灰色強粘質土

第25図 第6次調査遺構図(土坑2)



第26図 第6次調査溝横断(溝)

ハサ干しであった。調査区付近に営まれていた水田では、近代の耕地整理施工以前にはハサ干しが行われていたのであろう。

調査範囲の東端である1994年度調査I区では河川跡が検出されている。南北方向の流路の西岸がかかったもので、同岸は2005年度調査D区でも確認されている。河川の幅は15m以上、深さは1m以上あり、ある時期水を湛えていたものとみられる。この河川ないし巨大な落込みは中世集落の廃絶の後に埋没したものであるが、居住されていた時点で水域として存在していたかどうかは明らかではない。上記SD9513北方の河川跡についても同様である。

第3節 遺物

【第5次調査】

土器・陶磁器は1～123、木製品はW1～45を実測した。その多くは中世であるが、古墳時代、近世の遺物も少量含まれる。

SK10

7～9が出土した。7は外面に蓮弁文のはいる青磁碗。8は口唇部に弱い沈線が巡る越前焼鉢の口縁部片で播目はみられない。高台の付くタイプか。9は加賀焼の甕である。口縁部を外反させ端部をわずかにつまむ。时期的には他の2点より古く13世紀前半～中頃。7・8は13世紀後半～14世紀前半におさまるもので土坑の年代となるか。

SK11

SK10に隣接する大型の竪穴状遺構で10～35が出土した。10～20は中・小の土師器皿で11cmを超える大皿はみられない。土師器皿の量に10cm台の製品が定量出現するのは加賀地方では14世紀後半以降であり、同時に油煤痕の付着する資料も増加する。21は高台に4箇所の抉りをもつ全面施釉の白磁皿。見込には重ね焼きの目跡がみられる。25は瀬戸・美濃の卸皿底部で見込に卸目、外底面は回転糸切痕を残す。26、28は珠洲焼播鉢、27は加賀焼播鉢である。27の外側面には縦方向のケズリ調整がみられる。29、30は瀬戸・美濃の灰軸折縁深皿。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部を外反させ端部をつまみ上げる。底部はないが三足の脚が付くと思われる。共に漆接ぎ痕がみられる。31、32は瓦質火鉢で、31は浅鉢、32は風炉であろう。出土資料中には年代幅はあるが、12～16の厚手の平・丸底となる土師器皿、21の白磁皿、25の卸皿、32の瓦質風炉等から15世紀前半～中頃を想定しておきたい。

W1～8はSK11から多量に出土した箸状木製品の一部で、長さは17cm～23cm台と幅がある。いずれも両端を尖らせてあり、使用後に一括廃棄されたものと思われる。

SK12

36が出土した。青白磁の小壺の蓋で完形品である。外面は口縁部まで釉が掛かり裏面は露胎となる。文様は草花文が浮文で表現されている。蓋内部の深みがやや浅く12世紀後半以降の製品か。

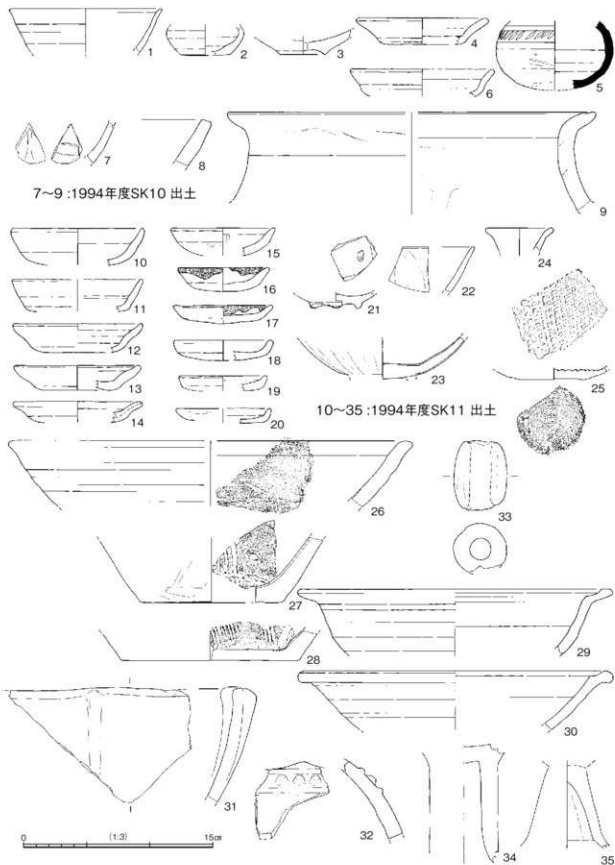
SK14

37～43が出土した。37～39は厚手の土師器皿で平底と丸底がみられる。口縁周囲全体に油煤痕の付着する39の内面には成形痕と思われる格子状の圧痕が認められる。40は端反りの青磁碗で内外面には粗い貫入がはいる。41は瀬戸・美濃の天目茶碗。口縁部の外反は弱く体部下半は露胎となる。42は瀬戸・美濃の直縁大皿で内面途中まで灰軸が掛かる。SK11に近い15世紀代の製品が主体をしめるようである。

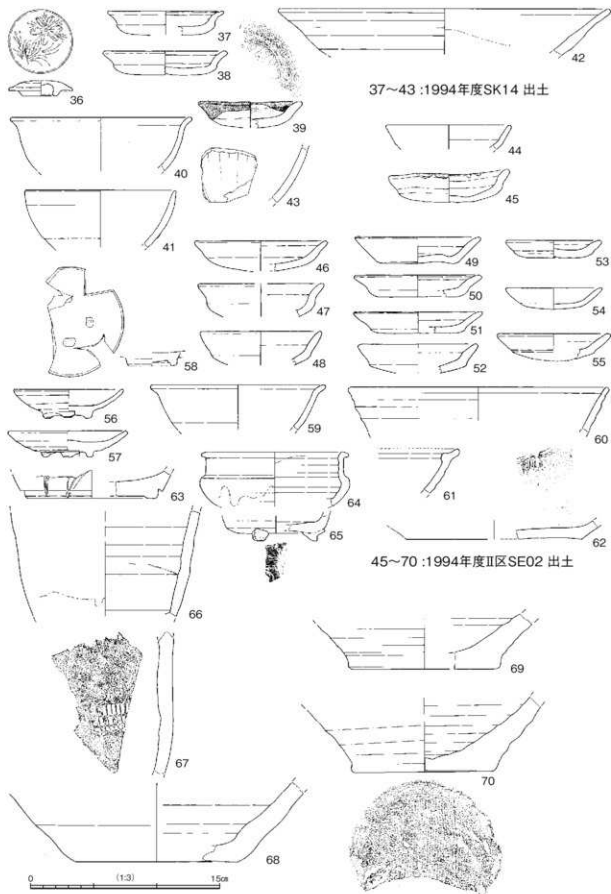
SE01

44は口縁部の立ち上がりが屈曲する青磁皿である。底部はないが、見込に劃花文様が施されている可能性がある。12世紀後半以降にみられる。

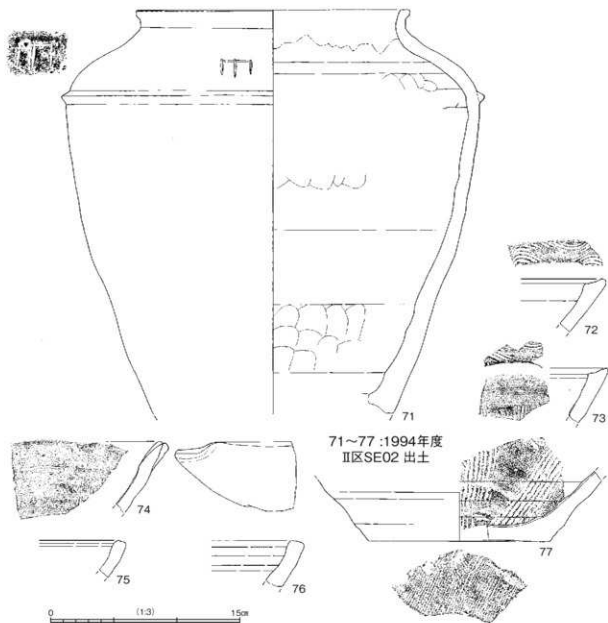
W9～11の井戸側を取り上げている。底板を抜いた曲物を積み上げた曲物積の井戸であり、W11の下方には底板を止めていた木釘が部分的に残る。SB09内におさまっているが建物に付く井戸かは不明である。



第27図 第5次調査遺物図(土器1)



第28図 第5次調査遺物図(土器2)

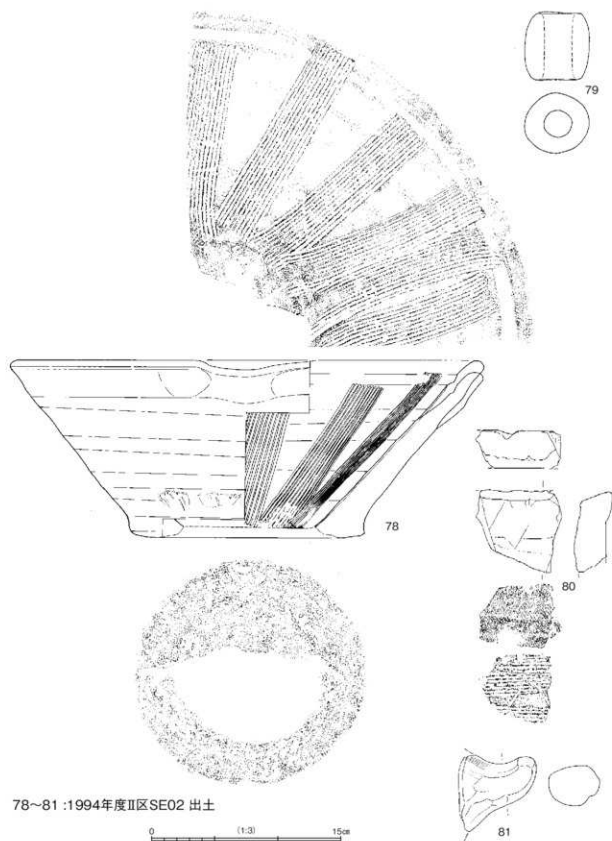


第29図 第5次調査遺物図(土器3)

SE02

径4.2m、深さ2mの大型井戸で大量の遺物が出土している。土器・陶磁器類では45～81がある。45は井戸内の下層から出土した土師器皿で、口縁部及び内面に油煤痕がまばらに付着する。注目すべきは、出土洗浄後長時間を経ても強い異臭を放っていたことであり、主観的に魚臭に近いと判断した。当資料については脂質分析を実施し、菜種油に特徴的なエルカ酸やステロール組成等の検出を試みている。結果としてはエルカ酸の比率が低いが、動物性ステロールの比率も2割弱と低く、鰯油・鯨油に特徴的なDHA（ドコサヘキサエン酸）も検出されなかった。そのため、土壌からの汚染と脂質の分解のため内容物の脂質組成が反映されなかったと解釈されている。

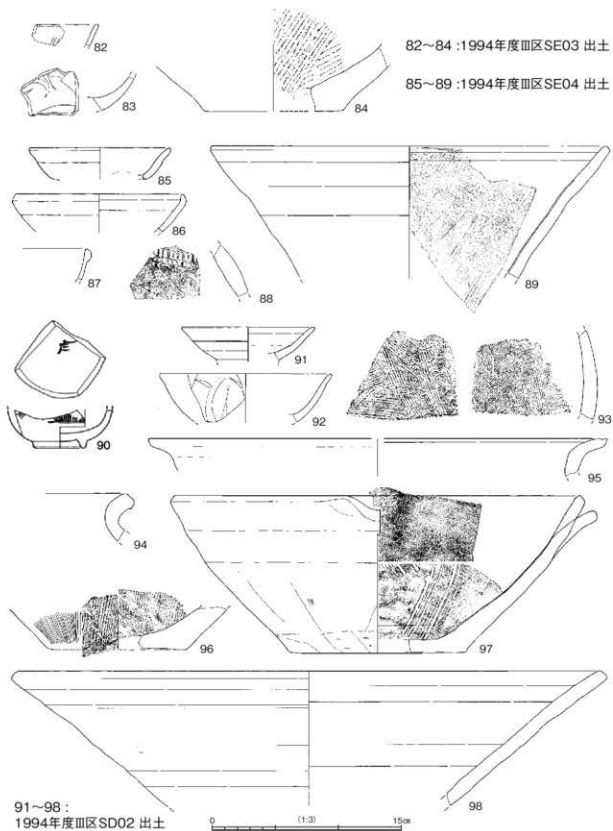
他の土師器皿については、顕著な油煤痕も異臭も認められない。いずれも厚手の成形であるが、49～51は平底で、SK14出土資料と同様に丸底製品と共存する可能性がある。56～58は白磁皿。58は挟りのない輪高台で高台周辺及び高台内は無釉となる。それに対し56、57は高台内も含め全面施釉の製



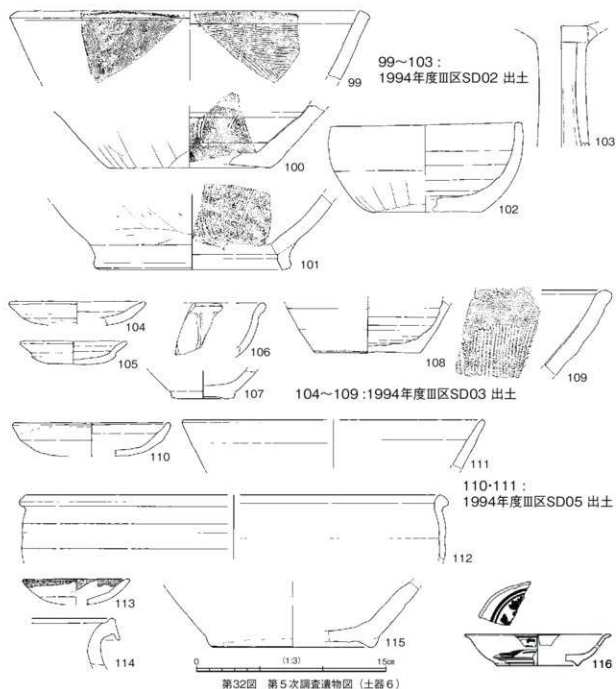
78~81 : 1994年度Ⅱ区SE02 出土

0 (1:3) 15cm

第30図 第5次調査遺物図(土器4)

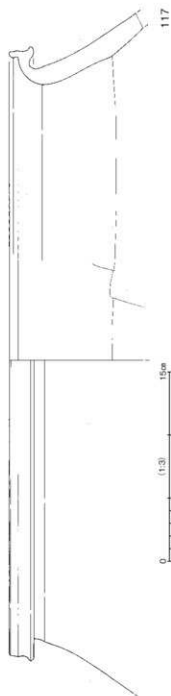


第31図 第5次調査遺物図(土器5)



品である。60～66は瀬戸・美濃陶器である。61、62は卸目付大皿か。62の底部は内外面無軸で内面立ち上がり部分に線刻状の卸目が入る。64、65は灰軸の掛かる袴腰形と筒形香炉であり、外面体部下半は露胎となる。64は直立気味の口縁から端部を嘴状に屈曲させる。65は脚部脇から急角度で立ち上がる器形で、断面には漆接ぎ痕がみられる。

67、68は共に落雁状の密な胎土をもつ加賀焼の甕、播鉢である。67は外面に薄いオリーブ灰色の自然釉が掛かり、縦長格子状の押印がみられる。14世紀代に盛期をもつ湯上エノカミダニ窯の製品と思われる。68は内外面無軸で焼成不良のため全体に軟質である。図には示されていないが、内面にわずかに播目が認められる。69、70は珠洲焼壺の底部。69は割れた後に播鉢に転用したようで内面には平滑な使用痕が認められる。71は越前焼甕とした。口縁部は短く外反し、端部は水平に面取りされる。



肩部は大きく張り出し頂部に断面三角形の突帯を一条貼り巡らせ、その上方一箇所に刻文が入る。15世紀代におさまるものか。72~77は珠洲焼播鉢。72、73の内傾した口縁端部には櫛描き波状文が巡る。78は底部中央の約半分だけ欠いた完形に近い越前焼播鉢である。外面は直線的に立ち上がり口縁部近くでやや緩やかに内傾し、一箇所に弱い張り出しをもつ片口を設けている。口縁端部は丁寧に丸く仕上げ、端部下2~2.5cmに幅0.5~0.8cmの沈線を巡らせている。播目は見込脇から上方の沈線を目指して11条3.4cm幅の櫛状工具で、下から上へ12単位施されるがその長さ及び間隔は均一ではない。なお、井戸内上層からの出土であるが播目もほとんど磨り減っており、使用途中の生活用具を何らかの理由で底部を打ち欠き廃棄した可能性も考えられる。15世紀後半を下限とするか。

S E02からは木製品の出土も多く、W13~35が該当する。W13は白木の折敷である。材質は薄く削ったヒノキで四隅を隅丸に仕上げている。そのため周囲に巡らす縁も隅丸部分は短く調整して両側につなげている。足は付かず、裏面をまな板として使ったためか小刀等の切り痕が多数みられる。W14、15は曲物等木製容器の底板であろう。W16~34は漆器碗、皿である。その多くは黒色漆塗りの内外面に赤色漆絵の文様が様々に描かれている。多くみられるのはW18、20、21、24、28の扇文であり見込の一つ大きく描く例が目につく。W22は土坡の上に竹、松、笹文、W23は橘、松文がみられるが、ここで最も注目されるのはW19の見込に描かれた百足と宝珠の組み合わせ文様である。共に赤色漆の濃淡によって塗り分けられ、宝珠を取り巻くようにして碗の縁を一匹の百足が巡っている。四柳嘉章氏によると百足文の事例は珍しく、広島県草戸千軒町遺跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡、高知県岡豊別宮八幡宮の各遺跡で出土し共に吉祥文様として認識されているようである。

その他石製品ではS7、10、11、14、18、22、25、29が出土した。S10、11、14は行火関連、S22、25、29は砥石である。金属製品ではM1、2の鎌、M4の小刀柄がある。

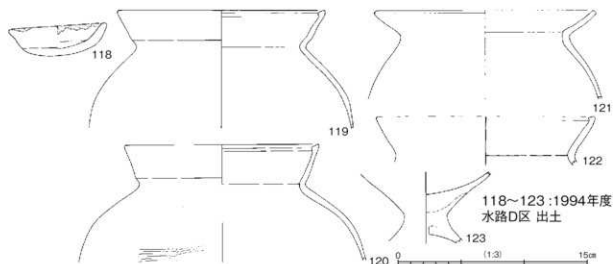
なお、S E02の年代については、口縁部に強い横ナデを施した一連の厚手の土師器皿、56~58の白磁皿、64の袴腰形香炉、72、73の播鉢などから15世紀前半~中頃を想定しておきたいが、71、78の越前焼についてはもう少し下がる資料かもしれない。

小林正史。2002 「脂質組成からみた中世から近世への灯明油の変化」【人類史研究13】

四柳嘉章 2006 【ものと人間の文化史131-II・漆 II】 法政大学出版社

S E03

82、83は12世紀後半以降にみられる器面に劃花文を施した青磁碗である。ただしそれらより新しいと思われる珠洲焼播鉢の底部片が



第34図 第5次調査遺物図(土器8)

井戸の掘り方から出土している。

SE04

85~89が出土した。86の土師器皿は口径13.2cmと大きく、口縁端部を内側に押さえて面を作る。87は玉縁口縁の白磁碗。88は加賀焼堯片で格子状の押印が入る。89は加賀焼播鉢。灰色で焼成は良好、内面にはまばらな播目が下から上へ施される。

W36~42が出土した。W41は井戸側となる曲物片で、その他の多くは曲物を重ねて井戸側とする際に間に挟んでくさび状としたスギの板材である。W42はヒノキ材の板片で四隅を切った角切折敷の可能性ある。遺構の廃棄年代としては、土師器皿や87の白磁碗などから13世紀前半代を下限としておきたい。

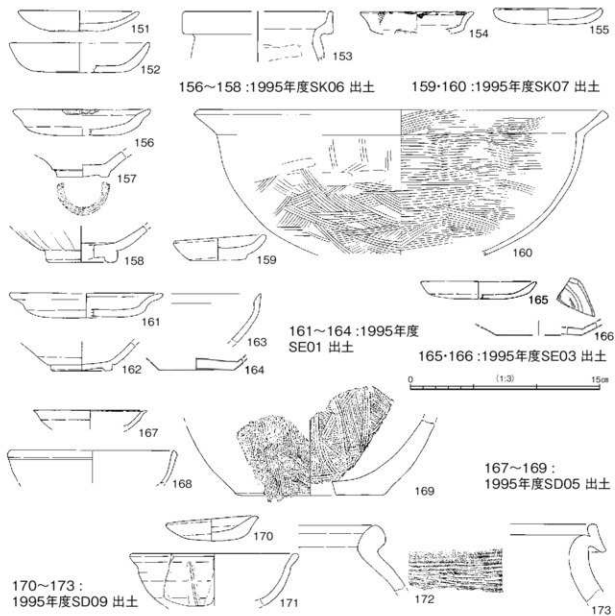
SD01

90は内外面に貫入の入る染付碗である。再興九谷の若杉窯の可能性ある。19世紀代の製品である。

W43~45が出土した。W45は漆塗りの平折敷である。内面は赤色、外面は黒色漆塗りで縁及び足の接合には木釘が用いられている。

SD02

91~103が出土した。91は口縁部が緩やかに外反する白磁皿。体部外面と内面立ち上がり部に沈線が巡り、文様はみられない。92は同弁の入る青磁鎗蓮弁文碗である。93は内外面にハケ調整を施す堯胴片。胎土は均質でしまっているが焼成不良で土師質状となっている。こうした特徴的な調整をもつ一群は那谷カミヤ窯で確認されており、加賀焼の最初期に位置づけられている。96、99も同様の製品であるが、やはり焼成が不安定なためか瓦質状の質感をもつ。99は外面縦、内面横方向のハケ調整の上に播目を施した播鉢である。95は口縁部を大きく外反させ端部をわずかにつまみ上げる加賀焼堯片である。外面には自然軸が掛かり器形は大きく歪んでいる。ハケ調整の一群に続くニツ梨オクダニ窯の製品と思われる。97は加賀焼の播鉢で、内面には縦及び斜め方向の不規則な播目が入る。ただし使用されて平滑になっているのは見込から続く下半分程度である。101は越前焼の播鉢底部であり、断面台形状のしっかりとした高台が付く。浅い播目が入るが降灰のため不鮮明となっている。播鉢として使用された形跡がないため盛鉢などに用いられていたのかもしれない。102の鉢は一般的にはみられない器形で特殊品である。底部から緩やかに内湾して立ち上がり口縁端部は水平に面取りされる。

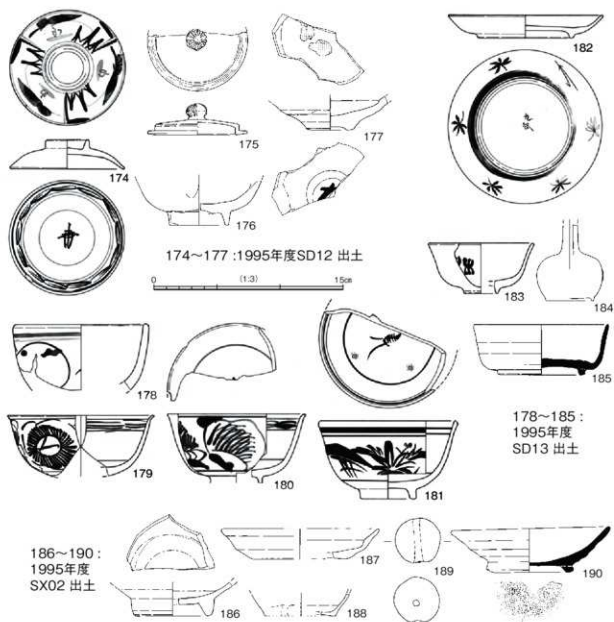


第35図 第6次調査遺物図(土器1)

成形は粘土紐の輪積みと思われ底面には粘土の接ぎ痕がみえる。また、内外面ともに降灰による自然軸が掛かる。体部の立ち上がりに縦方向のケズリ調整がみられるため加賀焼としておきたい。SD02は居住域の西側を区画した重要な溝であり2条の溝が重複していると考えられる。出土品については91の白磁皿、一連の加賀焼製品など12世紀後半代の資料が多く、その内の最初期の溝に伴うものと想定されよう。

SD03

104~109が出土した。104は10cm台、105は8cm台の土師器皿中、小皿である。口縁部は強く横ナデされ底部は緩やかな丸底となる。106は口縁部を外反させる青磁碗で端部はやや玉縁状となる。外面には蓮弁状の文様が施される。107は瀬戸・美濃の天目茶碗。高台を削り出し体部下半は露胎となる。108は瀬戸・美濃の灰軸瓶子か。外面には2条の弱い沈線が巡る。109は胎土に海綿骨針の目立つ珠洲焼播鉢である。口縁端部は丸く収め、播目は密に施されている。なお、SD03、05、09はSD02以来



第36図 第6次調査遺物図(土器2)

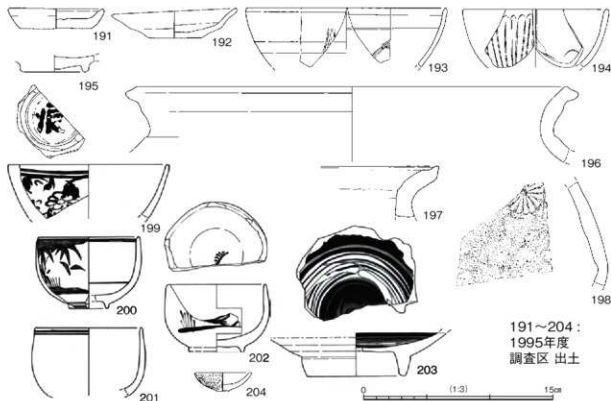
の居住区を南北にわたる東西方向の溝であり、何度かの掘り直しが確認されている。SD03からの出土品は15世紀前半～中頃と全体に新しいものも多く、一連の溝の最終段階に付く資料と思われる。

S D05

110、111が出土した。110は器面が剥離し調整等の確認は困難な土師器皿であるが、体部上半を横ナデし口縁端部に弱い面取りを施している。111は胎土のしまった加賀焼の挿鉢片である。内外面に灰が降り播目は確認できていない。両者ともに13世紀前代を下限とする製品と思われる、SD02と共に12世紀後半代から機能していた可能性も考えられる。

S D13

112が出土した。口縁部片であり内外面共に緑釉で塗り埋められているが、三彩盤の可能性もある。口径は32.7cmと大きく、口縁端部は玉縁状に仕上げる。胎土の砂粒が多く白色の化粧土を塗った上に緑釉を掛けている。SD02以西の溝であり以東の居住域とは一線を画する。12世紀代の製品か。



第37図 第6次調査遺物図(土器3)

【第6次調査】

土器・陶磁器は151～204、木製品はW51～89を実測した。その多くは中世であるが、近世、近代の遺物も一定量含まれる。

S K 05

155が出土した。全体に摩耗するが口縁端部に弱い面取りがみられる。13世紀前半代までにおさまるものと思われる。

S K 06

156～158が出土した。156は口縁部を横ナデして外反させる土師器皿で平底気味となる。口縁端部の一箇所に油煤痕が付着する。157は瀬戸・美濃の灰釉平碗で体部下半は露胎となる。浅い削り出し高台で畳付には回転ロクロの糸切痕が残る。158は青磁蓮弁文碗で厚い釉が高台畳付も含め全面に掛かる。青磁碗は古いが他は15世紀前半代か。

S K 07

159、160が出土した。159は今報告では出土例の少ないロクロ土師器皿である。完形品であるが全体に摩耗して砂粒が浮き出ている。そのため外底面の糸切痕は僅かに確認できる程度である。口縁端部は丸く器高も浅いためロクロ土師器皿の最終段階に近い製品と思われる。160は外面全体に煤が付着する土師器鍋である。口縁部は直線的に開き端部には面取りを施す。12世紀後半代にみられるセット関係である。

S E 01

161～164が出土した。161は砂粒の含みの少ない均質な胎土をもつ土師器皿で、口縁部を外反させ

平底とする。162は瀬戸・美濃の灰軸平碗でS K06出土の157に比べ底部は薄く、高台径は広く、高台幅はやや狭くなる。163は瀬戸・美濃の鉄軸天目茶碗である。内面には茶筌を使用したような擦痕はみられない。164は平底の白磁皿底部。口縁端部は伏せ焼きにより軸の掛からない口禿となる。時期的には164の白磁皿はやや古い、その他は14世紀後半代か。

W52は黒色漆の内外面に赤色漆で松文を描いた漆器碗である。また、石製品ではS 15～17が出土した。S 15は宝篋印塔の相輪部分、S 17は同じく宝篋印塔の笠部分であるが四方の隅飾が欠損している。S 16は五輪塔の笠、火輪である。なお、S 15はS E01の最下層から出土している。

S E03

165、166は第5次調査で実施した残りの半分から出土した。165は器壁が薄く口径も9cmと大きめである。166は外底部を無軸とする青磁皿で見込には劃花文が入る。前年度分も含め、13世紀前半を下限とする年代観が与えられよう。

S D05

167～169が出土した。167は口縁部を外反させ端部を先細りに仕上げた白磁皿。168は内外面に貫入の入る玉縁口縁の白磁碗で玉縁は小さめである。169は器面にハケ調整を施す加賀焼の挿鉢か。焼成温度が低く土師質状となっている。時期的には12世紀後半代の資料群と考えられる。

S D09

170～173が出土した。第5次調査のS D03、05と連続する溝である。170は今までみてきた土師器皿の中では器壁が最も厚く口径も6cm台と小さい。171は外面を蓮弁状に区画する青磁碗である。172は珠洲焼甕。173は口縁部をN字状に内傾させる加賀焼の甕である。湯上ユノカミダニ窯の製品と思われる。溝資料のため年代幅があるが、最も新しいのは15世紀後半以降と思われる170の土師器皿である。

なお、S D09の東端からはA～E 7まで17枚の銅銭が一括して出土した。初鑄年の最も古いのはE-2の軌元重宝の758年で、新しいのは唯一の南宋銭であるB-2の淳熙元宝で1174年である。また、数が多いのは皇宋通宝（1038年）と元豊通宝（1078年）の各5枚ずつであった。ただし、そうなるとS D03、05、09の最初期が1174年の12世紀後半・末期に近い可能性も考えられ、S D02とも関連してその存続時期が注目される。

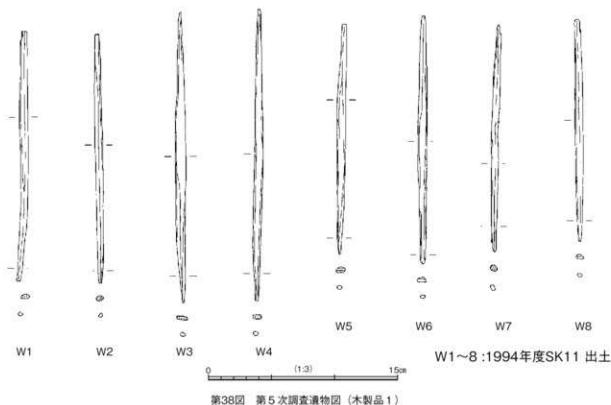
S D12

174～177が出土した。174は染付蓋である。外面には全体を三分割し帆掛け舟や松文などの風景を描き、内面中央には寿字を入れる。再興九谷の若杉窯の可能性ある。175は鉄軸蓋。口縁部内面は無軸とする。両者共に19世紀以降の製品である。176は外面青磁軸、内面透明釉の磁器碗で高台部を無軸とする。肥前で17世紀中葉。177は肥前の灰軸陶器皿。見込には重ね焼きの際の砂目が見られる。高台内に入るのは所有者を示す墨書であろうか。17世紀前半である。

その他S D12からはW53～81の日常生活用具を中心とした大量の木製品が出土した。W55は重箱で内面は赤色漆、外面は黒色漆地に赤色漆で文様を描いている。筒形容器（W57～61）、漆器碗（W63～67）、杓子（W68～71）、下駄（W76～81）が多い。W74は「だごもみ」と読める木筒である。種初より価値の低い屑米のことを指した表現とも考えられ、集積した依詰めの荷に付けられていた付け札の可能性ある。S 28は温石の破片である。

S D13

178～185が出土した。178は肥前の陶胎染付碗で外面に簡略した草花文様を描く。18世紀代。178、179は端反りの染付碗である。鮮やかな酸化コバルトを使用しており、明治以降の瀬戸・美濃製品と

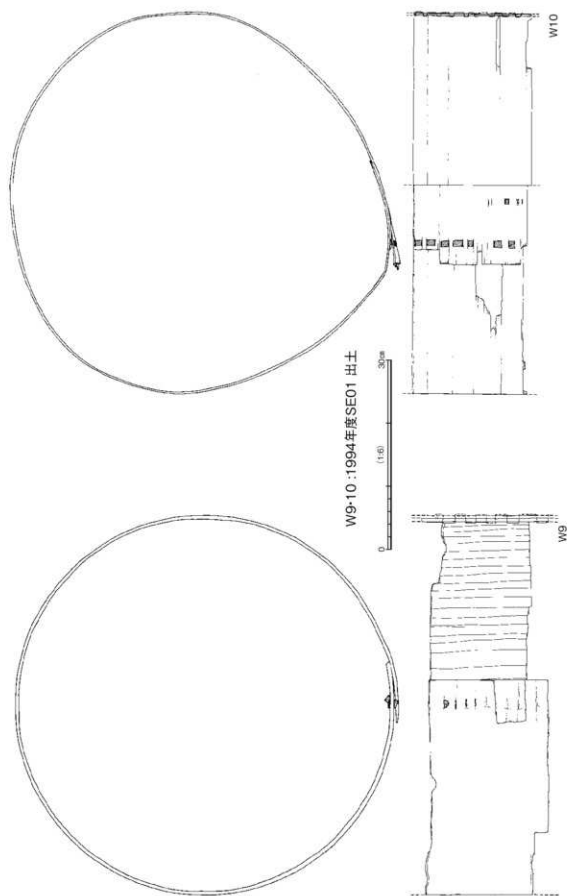


考えられる。181はやや厚手の染付碗で見込に重ね焼きの円錐ピンを使用した痕跡が残る。幕末以降の再興九谷か。182は色絵皿であるが内面の色軸はほとんど剥がれている。高台中央に赤で「九谷」とあり、明治期に入る再興九谷と思われる。183は美濃の染付湯飲み碗、184は産地不明の白磁一輪ざしである。

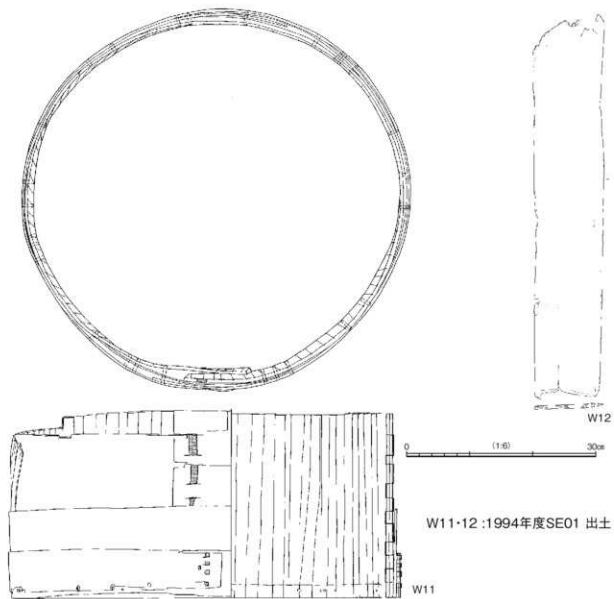
W82~89が出土した。出土内容はS D12に近く、共に近世~近代にかけて存続した溝跡と考えられる。

S X02

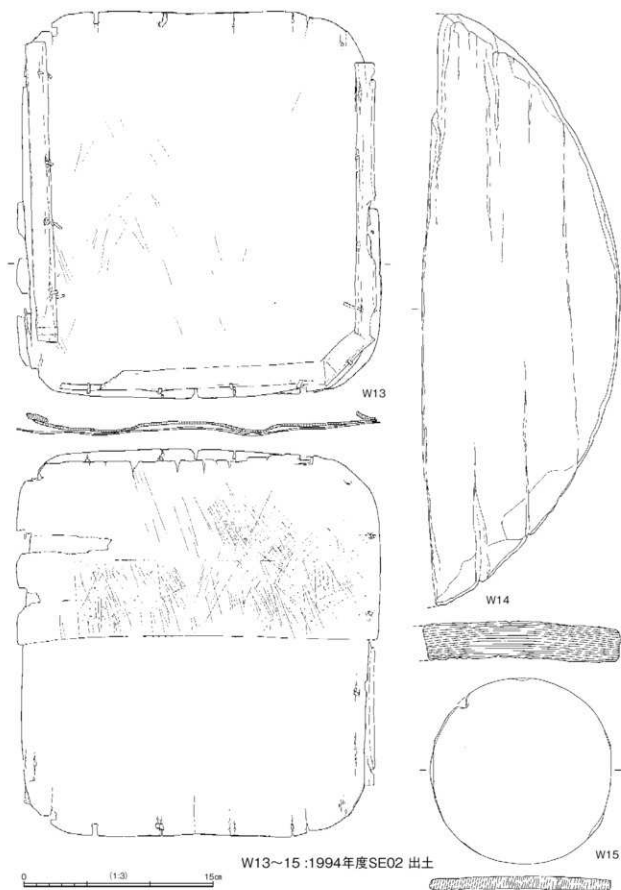
186~190が出土した。186は見込を蛇の目軸割ぎとする白磁碗。断面三角形の高台脇を斜めに削り取り、高台周辺は無軸とする。187は口縁部の立ち上がりを屈曲させ底部は無軸とする青磁皿で見込には劃花文が入るとされる。188は青白磁の小壺である。器壁は薄く仕上げ内面と底部周辺は無軸となる。年代的には12世紀後半~13世紀前半の出土が予想される一群である。



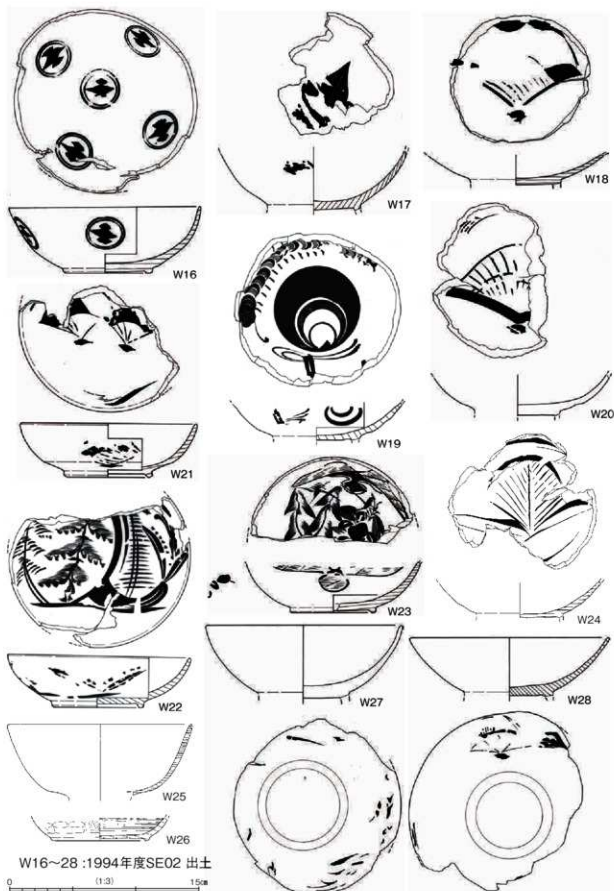
第39図 第5次調査遺物図 (木製品2)



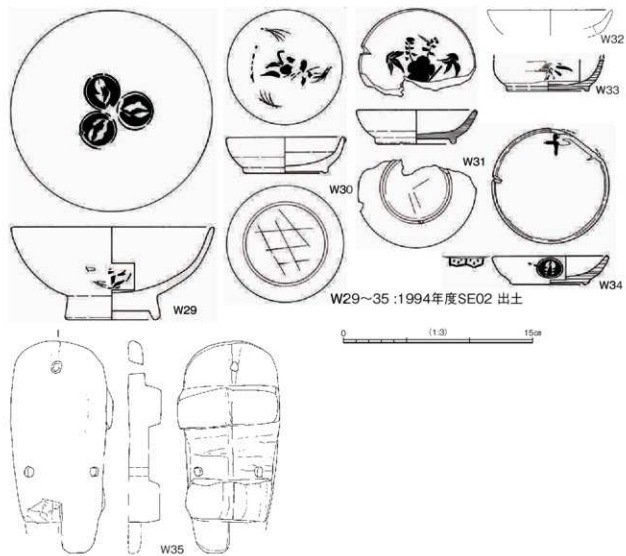
第40図 第5次調査遺物図(木製品3)



第41回 第5次調査遺物図(木製品4)

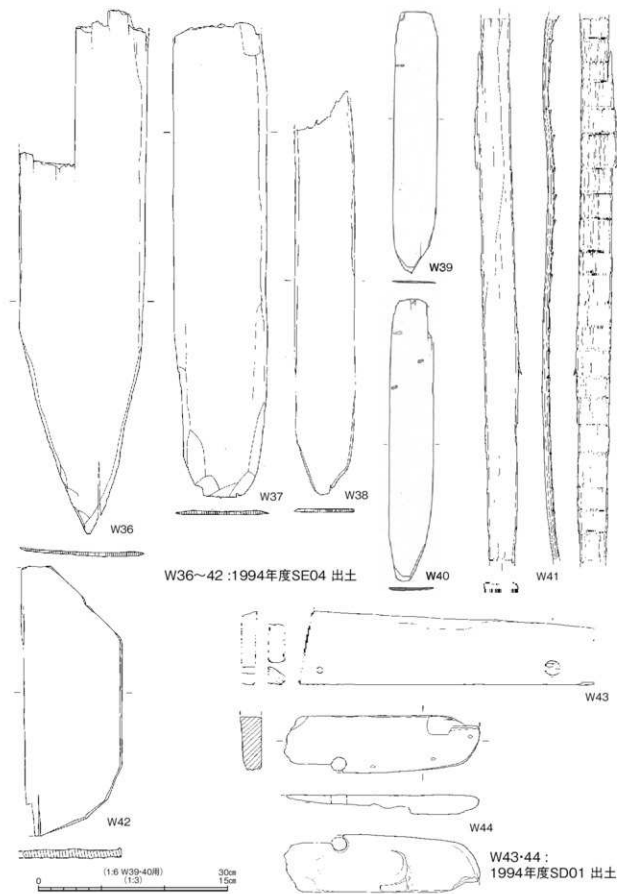


第42図 第5次調査遺物図(木製品5)

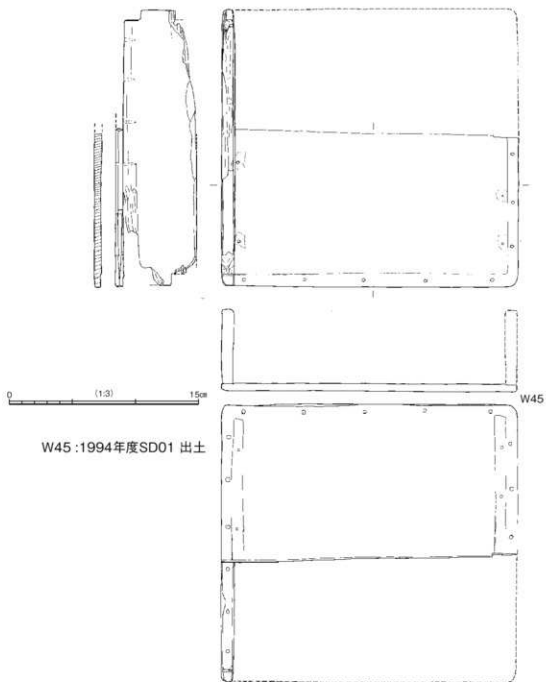


W29~35 : 1994年度SE02 出土

第43図 第5次調査遺物図 (木製品6)

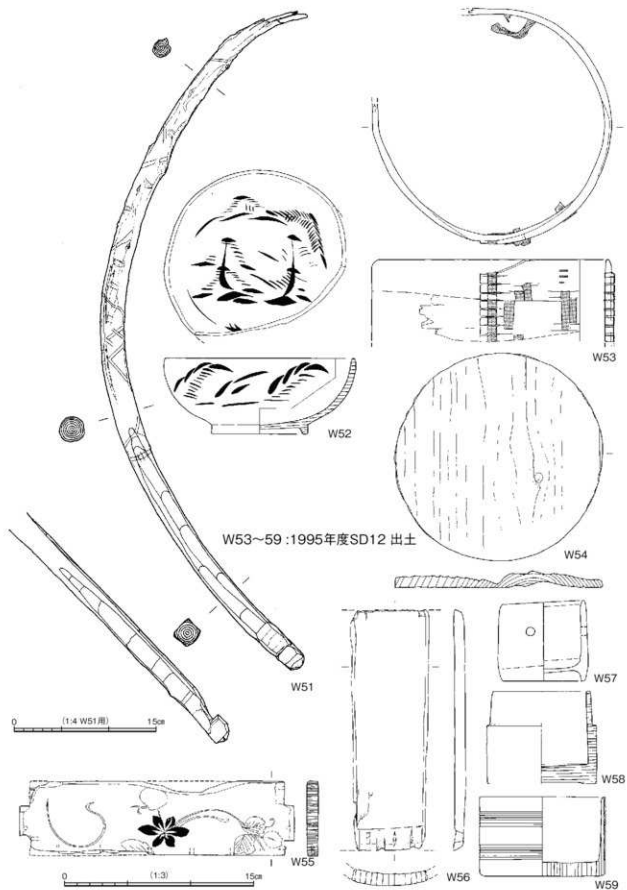


第44図 第5次調査遺物図 (木製品7)

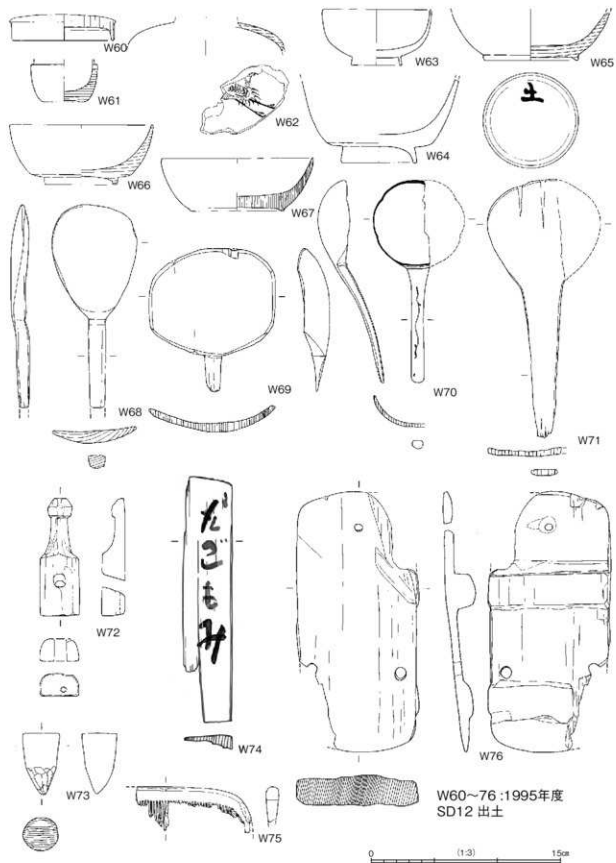


W45 :1994年度SD01 出土

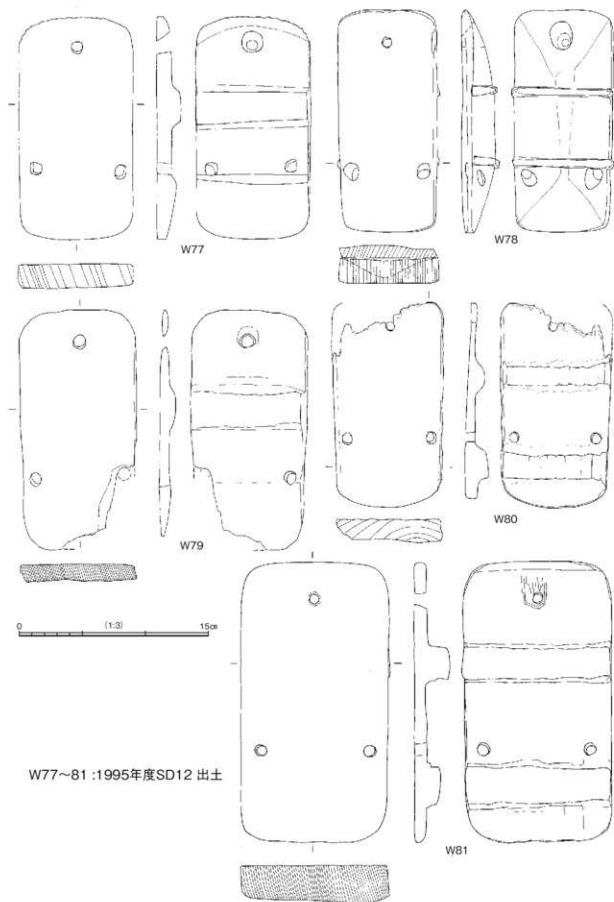
第45図 第5次調査遺物図(木製品8)



第46図 第6次調査遺物図(木製品1)

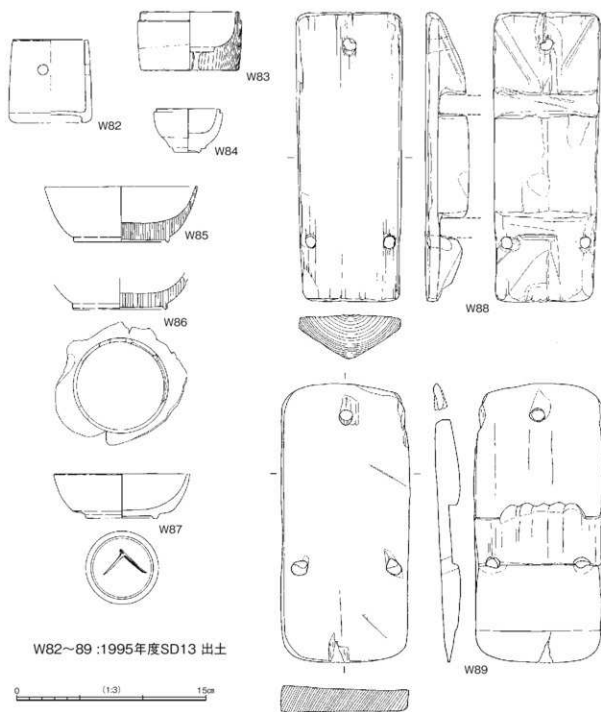


第47回 第6次調査遺物図 (木製品2)

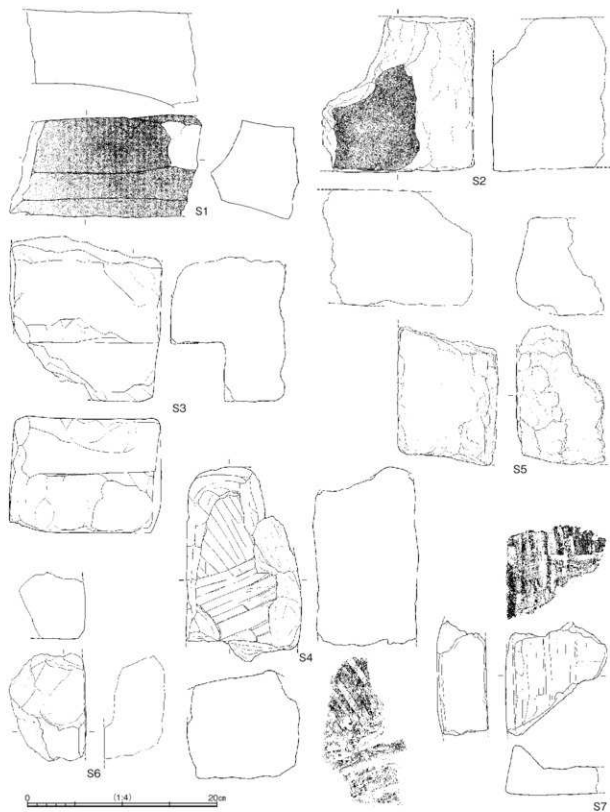


W77~81 : 1995年度SD12 出土

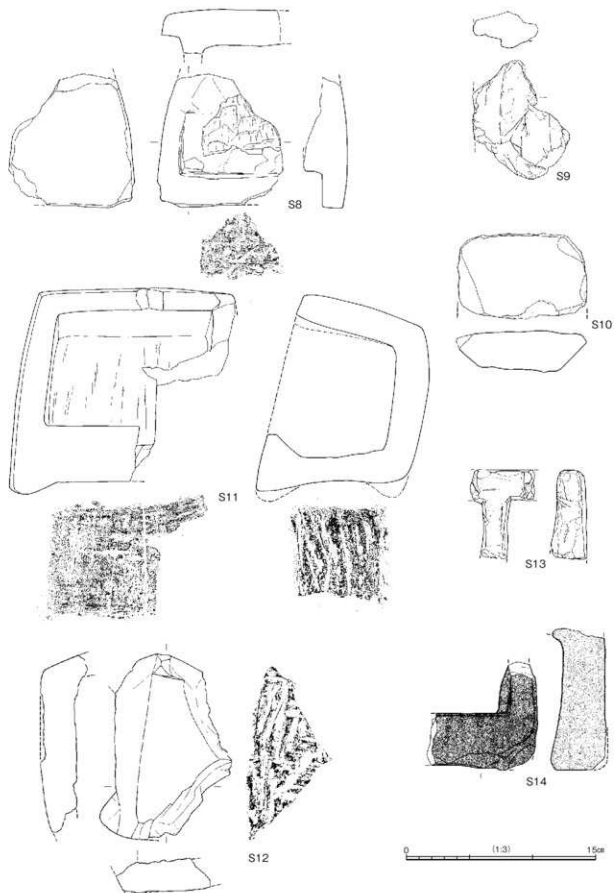
第48図 第6次調査遺物図 (木製品3)



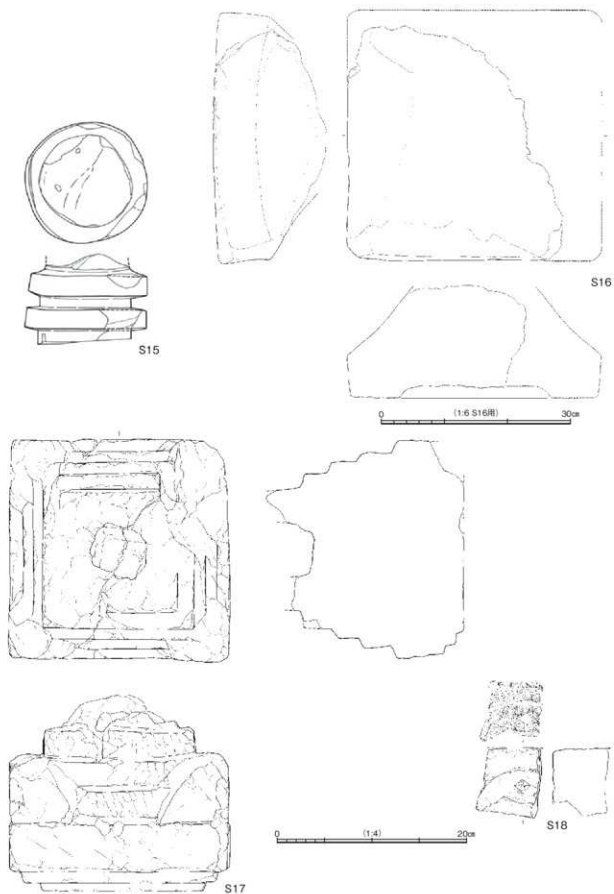
第49図 第6次調査遺物図(木製品4)



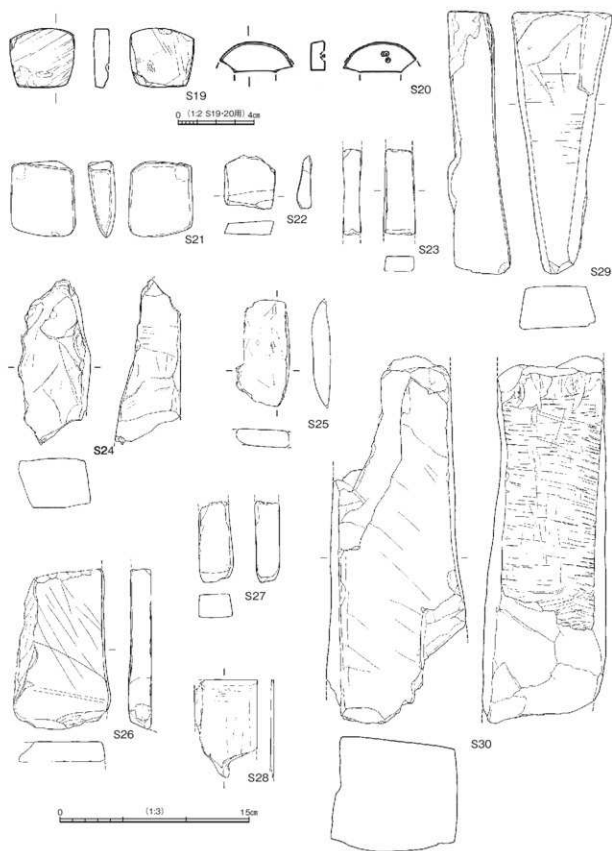
第50図 第5・6次調査遺物図(石製品1)



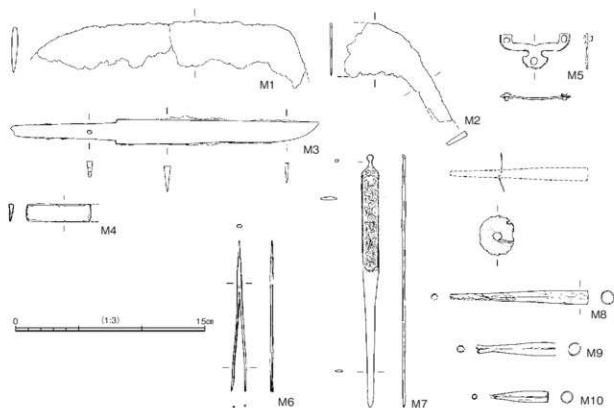
第51圖 第5・6次調査遺物図(石製品2)



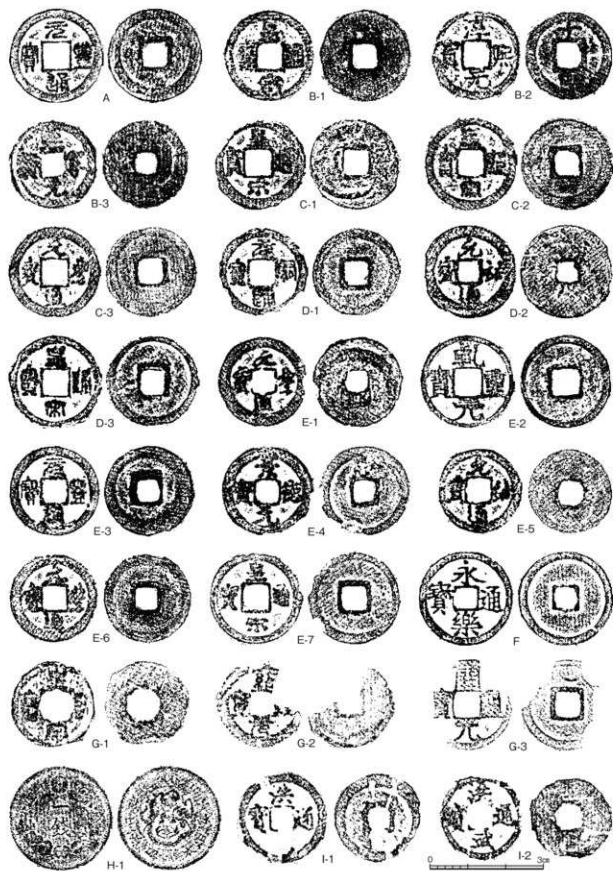
第52図 第5・6次調査遺物図(石製品3)



第53図 第5・6次調査遺物図(石製品4)



第54図 第5・6次調査遺物図（金属製品）



第55圖 第6次調査遺物圖(錢貨拓影)

報告番号	年次	出土区	出土地点	器種	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考	実測番号
W41	94	Ⅲ区	SE04	板瓦(遺物の表面)	スギ	43.3	3.6	0.7		本-31
W42	94	Ⅲ区	SE04井筒内	折敷小	ヒノキ属	21.4	(7.8)	0.9		本-25
W43	94	Ⅲ区	SD01	板材	スギ	23.4	(5.8)	1.4		本-29
W44	94	Ⅲ区	SD01	下駄	スギ	(15.5)	(4.6)	1.7	くゞ穴あり	本-28
W45	94	Ⅲ区	SD01	折敷	ヒノキ属	23.5	22.0	6.4	漆(内; 赤; 黒) くゞ穴、 脚痕あり	本-11
W31	96	E-7区	SK06中下層	たも	ヒノキ属	82.9	2.6	2.6	縄痕・挟りあり	本-42
W32	96		SE01	漆器碗		15.2		6.0	黒色漆に赤色漆塗	本-87
W33	96	I-11区	SD12	曲物		19.0		6.5		本-95
W34	96	J-13区	SD12	底板	ヒノキ属	16.5	16.5	1.1	踏穴あり	本-15
W35	96	H-10・11区	SD12	漆器重箱		21.8	5.9	0.9	内; 赤色漆 外; 黒色漆に赤色漆 塗	本-99
W36	96	J-13区	SD12	施帳板	ヒノキ属	19.1	6.3	1.0	釘痕、底板はめ込み痕あり	本-16
W37	96	I-13区	SD12	筒型容器	タケ	6.5	6.5	6.5		本-94
W38	96	H-10区	SD12	筒型容器			8.7	7.4	黒色漆	本-97
W39	96	J-14区	SD12	筒型容器		9.9	8.8	6.3	黒色漆	本-90
W40	96	I-11区	SD12	漆器蓋			8.4	2.1	赤色漆	本-113
W41	96	J-13区	SD12	漆器容器	(5.3)	(3.7)	(3.1)	赤色漆	本-117	
W42	96	H-10区	SD12	漆器蓋				(2.2)	赤色漆に漆塗	本-88
W43	96	J-14区	SD12	漆器碗	8.6	4.0	4.5	赤色漆	本-88	
W44	96	H-10・11区	SD12	漆器碗		6.0	6.6		黒色漆	本-100
W45	96	J-13区	SD12	漆器碗	(12.6)	7.5	(3.8)	黒色漆に赤色漆で「上」	本-118	
W46	96	J-13区	SD12	漆器碗	11.4	5.8	4.8	黒色漆	本-119	
W47	96	J-14区	SD12	漆器碗	11.9	7.4	4.2	黒色漆	本-89	
W48	96	J-13区	SD12	漆器杓子	モクレン属	16.2	6.7	1.2	黒色漆	本-92
W49	96	H-10・11区	SD12	杓子		11.4	10.0	2.5		本-96
W50	96	J-13区	SD12	漆器杓子		16.1	(3.8)	1.1	輪花型、黒色漆	本-27
W51	96	J-13区	SD12	杓子		20.6	5.8	0.6		本-34
W52	96	I-11区	SD12	板瓦の部品	広葉樹(散孔材)	9.3	3.1	1.8	本釘1本残存	本-38
W53	96	H-10・11区	SD12	槍		4.9	2.9	2.6		本-101
W54	96	H-10区	SD12	木箱		19.6	3.9	1.1	墨書「たごもみ」	本-39
W55	96	J-14区	SD12	輪	ヒヤカキ	(9.2)	(3.7)	1.0		本-33
W56	96	H-10区	SD12	下駄	ケヤキ	20.7	9.7	2.6		本-32
W57	96	H-10区	SD12アゼ	下駄	スギ	17.6	9.1	2.0	漆(赤) 痕あり	本-17
W58	96	H-10・11区	SD12	下駄	広葉樹(散孔材)	17.6	8.1	3.0		本-37
W59	96	H-10・11区	SD12	下駄	ケヤキ	(19.1)	9.4	(1.5)	摩耗著し	本-109
W60	96	I-12区	SD12	下駄	ツツ属樹皮系木属	15.8	8.8	1.9		本-36
W61	96	J-13区	SD12	下駄	広葉樹	22.3	11.9	3.1		本-35
W62	96	G-14区	SD13	筒型容器	タケ	6.0	5.5	6.1	内外面に漆付着	本-93
W63	96	F-G-14区	SD13	筒型容器	モクレン属	7.6	7.4	4.6	閉り(平滑)・口穴閉りか	本-35
W64	96	G-14区	SD13	漆器小碗		5.0	1.7	3.5	まごこ道具か?	本-92
W65	96	F-14区	包含物	漆器碗		12.2	7.6	4.4	黒色漆	本-102
W66	96	F-G-14区	SD13	碗	ヒヤカキ		7.3	2.5		本-34
W67	96	G-14区	SD13	漆器碗		10.6	5.7	3.6	黒色漆、高台内に赤色漆の文様	本-91
W68	96	F-G-14区	SD13	下駄	モクレン属	23.0	8.5	3.5		本-21
W69	96	G-14区	SD13	下駄	ケヤキ	22.2	10.2	2.2		本-30

第4表 木製品一覧

報告番号	年次	出土区	出土地点	材質等	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考	実測番号
S1	94	Ⅲ区	SE04井筒内		緑石か	(20.2)	10.8	(9.7)	外面漆付着	石-18
S2	94	Ⅲ区	SK11ト空	燧石	緑石	16.6	16.1	12.3	漆付着	石-20
S3	96		SE01断片以下		緑石	(17.5)	16.0	12.1		石-26
S4	94	Ⅲ区	SK11上層		緑石	(20.7)	12.3	11.2		石-23
S5	94	Ⅲ区F-9南部	SD02		緑石	14.7	9.3	10.4		石-5
S6	94	Ⅲ区	SE05		緑石	(10.8)	(8.2)	(7.0)		石-7
S7	94	Ⅲ区	SE02井筒内上層吹出粘		火鉢	(12.1)	(10.8)	(5.4)	内外面、顔内口: 漆付着	石-15
S8	94	水跡A-3区	包含物		行火差	(10.2)	(10.0)	(3.5)		石-8
S9	94	I区	沼河道上面		行火差	9.4	7.7	3.1		石-9
S10	94	Ⅱ区	SE02北平上部		行火差小	6.7	10.2	3.5		石-1
S11	94	Ⅱ区	SE02井筒内上層		行火	14.0	(19.6)	16.2		石-39
S12	94	Ⅲ区	包含物		行火	14.5	15.8	2.8	内外面: 漆 ノミ痕あり	石-24
S13	96	E-7区	包含物		行火	7.0	5.1	2.8		石-13
S14	94	Ⅱ区	SE02南平上部		行火	(11.2)	(8.8)	4.3		石-16

第5表 石製品一覧

第4章 総括

今回の報告では中世の居住域が調査区の東側に集中することが確認された。その存続時期幅は出土遺物から12世紀～15世紀代と考えられるが、中でも12世紀後半～13世紀前半と15世紀前半～中頃の2時期に盛期があると推察される。当然その間の遺物様相には大きな変化が認められるが、ここでは第5次調査のS E 02から出土した特異な魚臭を発する土師器皿の発見を一つの契機として、中世から近世に至る灯明油の変遷について考えてみたい。

中・近世の家屋内における一般的な照明は、油が主体だったと推定されている。魚油（鯨油・鰯油など）は上質の植物油に比べ、臭いが出る、煤が多いなどの問題点があるが価格は安価で中・近世を通じて使われたと考えられるが、実態は不明である。

発掘資料で土師器皿の食器機能に灯火具としての一面が加わり普及するようになるのは中世後期の14世紀後半以降のことであり、土師器皿の口縁部を中心に黒っぽい油煤痕が付くことで確認できる。なお、こうした状況はほぼ県下一円でみられるようになるが、一般的な集落において高価な植物油が使われたとは考えにくく、安価な魚油などの使用が増えた可能性を示唆している。また、油煤痕の付く箇所が口縁部の一部に限定される例が多いことから、灯明皿の使用頻度はそれほど高くないと考えられる。

中世における植物性灯明油の普及は、山城国大山崎油座の存在が大きく、「長木」と呼ばれる搾具によってエゴマ油が量産化され、種々の特権が行使されていた史実はよく知られている。原料の購入・加工から販売にいたる一連の独占権が時の朝廷により保護されていたのである。エゴマ灯油の需要は大消費地京都を中心に各地へ拡大したことが予想されるが、応永期（1394～1427）には大山崎神人の権威を否定する動きが一般化しはじめ、各地に在地の油商人が台頭するようになるという。

北陸における中世後半期の植物性灯明油の普及を一元的に捉えることはできないが、寺社などで恒常的に使用されていた可能性は十分に考えられる。例えば『永光寺文書』の康永3（1344）年7月に、「六日 三階家秀、浄詔、能登国永光寺に、同国羽咋湊保北方の田地を、仏殿本尊灯油料として寄進する」とあり、また同文書の貞和3（1347）年正月に、「十五日 良詔、無底、能登永光寺に、同国羽咋湊保吉崎内の田地を、土地堂及び僧堂の灯油料として寄進する」との記載がある。永光寺は石川県羽咋市本江町に所在し、正和2（1313）年に開山した曹洞宗の名刹である。この文書中に記された「灯油」はエゴマ油を指すと推定される。

なお、栽培種としてのエゴマはすでに縄文時代に認められるが、石川県内の中世遺跡の井戸・土坑内からもエゴマあるいはエゴマ近似種の植物化石が一定量確認されている。小松市の佐々木アサバタケ遺跡では、29号井戸（10世紀中～11世紀前半・1点、14世紀・2点）、33号井戸（12世紀前半・1点）、27号井戸（14世紀前半・1点）、31号井戸（14世紀中～15世紀後半・28点）、37号井戸（時期不詳・7点）、44号井戸（時期不詳・1点）で計41点のエゴマ種実が認められ、当白江梯川遺跡でも、第4次調査の406号井戸（14世紀後半～15世紀前半以降）から7点のエゴマ近似の種実が検出されている。エゴマは古代より食用・薬用・灯油用として記録に現れるが、特に中世後半以降のエゴマ栽培に関しては、搾油作物としての可能性も十分考慮する必要がある。

さて、近世初期になると油煤痕が付く土師器皿の比率はさらに増加する。例えば、金沢城下町遺跡の一つである兼六園・江戸町跡推定地では17世紀初頭の一括資料中、出土土師器皿の約6割に油煤痕が確認され、その付着面積も増加する。近世になると榎を用いた「立木」による新たな絞油法が摂津

国遠里小野村で考案され、菜種油が市場に登場する。寛永15（1638）年の『毛吹草』にはすでに山城山崎油と並び摂津遠里小野油が名産品として取り上げられている。菜種油はエゴマ油に比べ油の精液が多く、灯すと明るく臭気や煙もないという。元禄10（1697）年に宮崎安貞によって編録された、近世農書の基幹となる『農業全書』にも「油菜」として「田畑に蒔くと繁茂しやすく、虫も食わないので、子実が多い。油をしぼると利益が上がるので、農民はこれをたくさん作っている」と記されている。

17世紀後半になると金沢城下で出土する土師器皿（口径10～12cm台）において、油煤痕が全周を巡るものが多くなる。連続した油煤痕は幅5mm程度の縦長の油煤痕が連続・重複した結果であることから、灯明皿の使用頻度が高まったことが示唆される。さらに、18世紀も半ばを過ぎると、乗燭・カンテラ・タンコロなどの灯火専用器具が出現する。

この時期では、灯油の消費量が増大したことが文献史料から読み取れる。文化18（1811）年に作られた『金沢町方絵図名帳』によると、城下内に灯油製造用水車を設けた油白元は9軒、油小売商に至っては140軒（商人構成の上位6番目）が記録され、その需要の多さを裏付けている。灯油製造職人は慶長（1596～1614年）から正保（1644～47年）頃に城下町育成政策に伴い石川郡松任から呼び寄せられ、また文政2（1819）年以後には一切の公的灯油製造は松任で行われることとなり、金沢での水車は中止された。この藩政期の日没以降の生活を支えた灯油が菜種油であったことは、宝永4（1707）年に加賀藩の十村、土屋又三郎によって著された北陸を代表する農書『耕稼春秋』から推定できる。その中の「菜種」の項には、「近くの国々の中では加賀の国が最も多く菜種を作っている。特に石川郡では多く作り、中出も野々市から柏野村あたりまでの三里四方の地域に多い。そもそも菜種を植えるには、土質のよい乾田で、特に排水のよい乾きがちのところ適している」とある。この記述はまさしく旧石川郡松任周辺の菜種栽培の様子を示しているといえる。

一方、先の『耕稼春秋』にはエゴマに関する記載もあり、「加賀ではあまり作らないが、越中や能登では多く作って油を絞る。そのほかの国では、エゴマの他に油桐から油をとっている」とある。この中でエゴマと同列に扱われている油桐とは、油紙用、駆虫用などに用いる桐油のことである。おそらく古代、中世以来良質の灯油として市場を独占してきたエゴマ油も、すでにこの段階では灯油用以外の用途で栽培されていたと考えられる。

以上、中世から近世への灯明油の変遷を概観してきたが、14世紀後半と17世紀後半に灯明用の土師器皿からみた大きな画期があるように思われる。最初に提起した動物性油に関して具体的な事例はあげられなかったが、植物性油に関しては、①中世から近世への流通規模の拡大、②エゴマ油から菜種油への移行、③それに伴う動物性油への依存度の低下、④灯油需要の地域間・身分格差の中世から近世への拡大が推定されよう。

引用・参考文献

- 武藤軍一郎（編） 1978 「巻之三 菜之類」『農業全書』 農山漁村文化協会
清水隆久（編） 1978 『農業遺書』日本農書全書5 農山漁村文化協会
津田秀雄 1983 「燈油」『講座・日本技術の社会史1（農業・農産加工）』 日本評論社
清水隆久（解説） 1983 『農業図録』 農山漁村文化協会
深津 正 1983 『ものと人間の文化史50・燈用植物』 法政大学出版局
田中喜男 1984 『城下町金沢』 亞細社
石川県立埋蔵文化財センター 1988 『佐々木アサバタケ遺跡Ⅱ』
石川県立埋蔵文化財センター 1989 『白江柿川遺跡Ⅱ』
石川県立埋蔵文化財センター 1992 『特別名勝兼六園 江戸町跡推定地』
加能史料編纂委員会 1993 『加能史料 南北朝』
石川栄輔 1994 『大江戸リサイクル事情』 講談社
須田英一 1995 「エゴマの利用法とその民俗」『考古学ジャーナル』399
藤田邦雄 1997 「中世加賀国の土師器種相」『中・近世の北陸』 北陸中世土器研究会
小林正史。 2002 「脂質組成からみた中世から近世への灯明油の変化」『人類史研究13』



調査地上空から西方を望む（1995年撮影）



調査地上空から東方を望む（1995年撮影）



II区SE01 (北から)



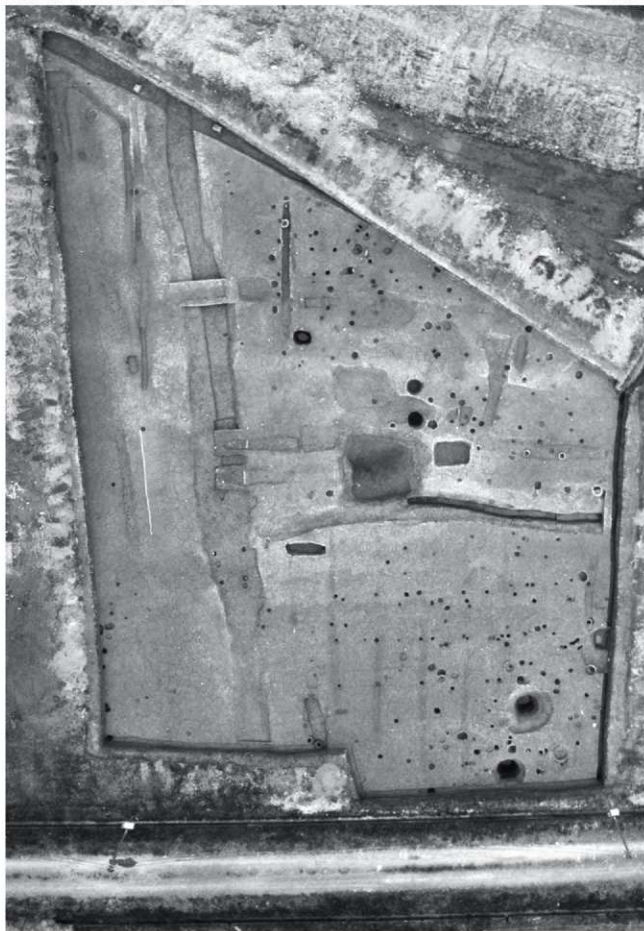
II区SE02 (北から)



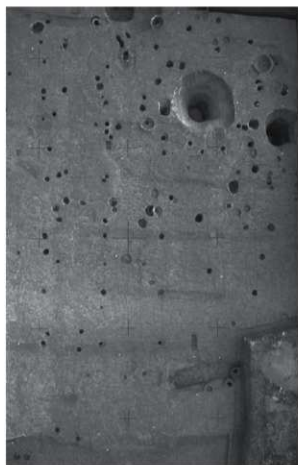
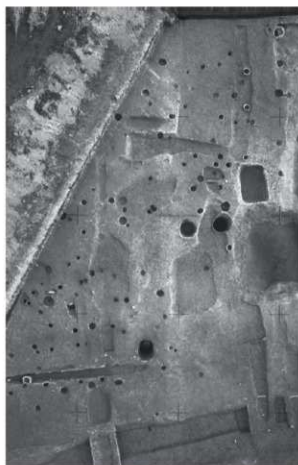
II区全溝 (上空から)

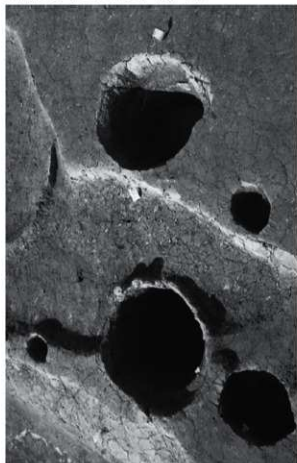


II区SK03 (南から)



Ⅲ区全景 (上空から)





III区SK12 (左) SK13 (右) (東から)



III区SE03



III区SK10 (手前) とSK11 (奥)



III区SK11 (北から)



III区SD01 (西から)



III区西部 (北から)



III区SE04



III区SE05



Ⅲ区SD03 (東から)



Ⅲ区SD14 (北から)



Ⅲ区SD02



Ⅲ区SD02浅底ピット群 (側面か)



I区遺構核出状況



I区河道岸核出状況



I区河道西岸土層断面



I区作業状況



II区SK03 (北から)



II区SK03 (東から)



II区SK04 (南から)



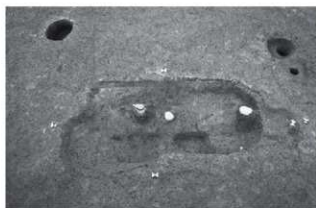
II区SK04炭化物核出状況



Ⅱ区SK05 (南から)



Ⅱ区SK05 (北から)



Ⅱ区SK06 (南から)



Ⅱ区SK06土層断面



Ⅱ区SE01土層断面



Ⅱ区SE01材検出状況



Ⅱ区SE02検出状況



Ⅱ区SE02掘削作業状況



II区SE02土層断面 上位



II区SE02土層断面 下位



II区SE02遺物出土状況



II区SE02遺物出土状況



II区SE02遺物出土状況



II区SE02遺物出土状況



II区SE02遺物出土状況



II区SE02掘削作業状況



Ⅲ区SK08 (南から)



Ⅲ区SK08土層断面



Ⅲ区SK10 (北から)



Ⅲ区SK10土層断面



Ⅲ区SK11 (西から)



Ⅲ区SK11土層断面



Ⅲ区SK11遺物 (箸) 出土状況



Ⅲ区SK11遺物出土状況



Ⅲ区SK12



Ⅲ区SK12土層断面



Ⅲ区SK13



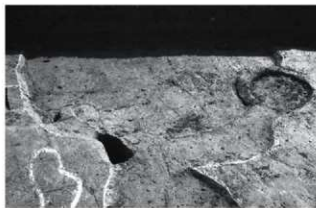
Ⅲ区SK13土層断面



Ⅲ区SK18



Ⅲ区SK18土層断面



Ⅲ区SE03検出状況



Ⅲ区SE03土層断面



Ⅲ区SE03骨片検出状況



Ⅲ区SE03上面（別ビット）木製品検出状況



Ⅲ区SE04井戸側検出状況



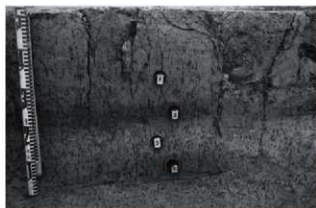
Ⅲ区SE04掘方土層断面



Ⅲ区SE05井戸内土層断面



Ⅲ区SE05掘方土層断面



Ⅲ区下層土壌試料採取状況（SK10壁面）



Ⅲ区掘削作業（SD03）



Ⅲ区SD01 (北西から)



Ⅲ区SD01土層断面



Ⅲ区SD01遺物出土状況 (W45)



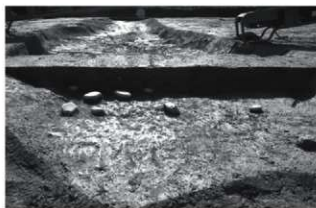
Ⅲ区SD01遺物出土状況 (編物)



Ⅲ区SD02遺物出土状況 (M05)



Ⅲ区SD02土層断面



Ⅲ区SD02土層断面



Ⅲ区SD02土層断面



Ⅲ区SD03土層断面



Ⅲ区SD04 (左) SD06 (右) 土層断面



Ⅲ区SD05土層断面



Ⅲ区SD06土層断面



Ⅲ区SD14土層断面



水路A区 (東から)



水路B区 (北から)



水路C2区 (西から)



水路C1区 (北西から)



水路D区SK01土層断面



水路D区SK03土層断面



水路D区SD01土層断面



水路D区東部 (北西から)



水路E区 (南東から)



水路E区SK01



水路E区中央部ビット群



第6次調査E区全景（上空から）



第6次調査W区全景（上空から）



E区SK02



E区SK06



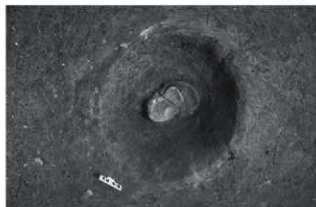
第6次調査E区全景 (東から)



E区SE01 (東から)



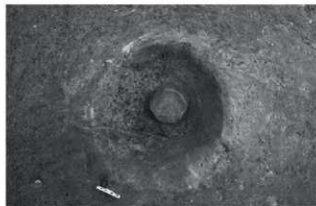
E6グリッド P01



E6グリッド P02



E7グリッド P01



E6グリッド P02 2



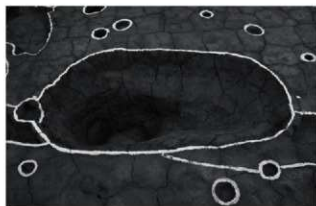
E区SK02土層断面



E区SK05 (西から)



E区SK05土層断面



E区SK06 (南から)



E区SK06土層断面



E区SK07 (南から)



E区SE01 (北から)



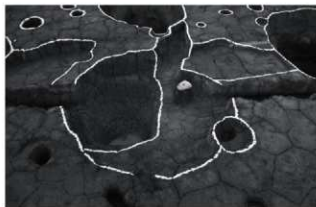
E区SE01炭化物層検出状況



E区SE01土層断面



E区SE01遺物出土状況 (W52)



E区SE03 (西から)



E区SE03土層断面



E区SD04 SK01付近 (北から)



E区SD04土層断面



E区SD09銅銭出土状況



E区SD09 (東から)



E区SD09遺物出土状況



E区SK03 (SD09) 遺物出土状況 (154)



E区SD09土層断面 西部



E区SD09土層断面 東部



E区SD04 SK01付近 (北から)



E区SD02 SD05土層断面



掘削作業状況 (E区)



W区北部 (西から)



W区中央部 (西から)



W区東部 (北から)



W区旧河道確認状況 西部



W区旧河道確認状況 東部



W区SD12 (北西から)



W区SD12遺物出土状況 (174)



W区SD12遺物出土状況 (W58)



W区SD12遺物出土状況 (W78)



W区SD12遺物出土状況 (W70)



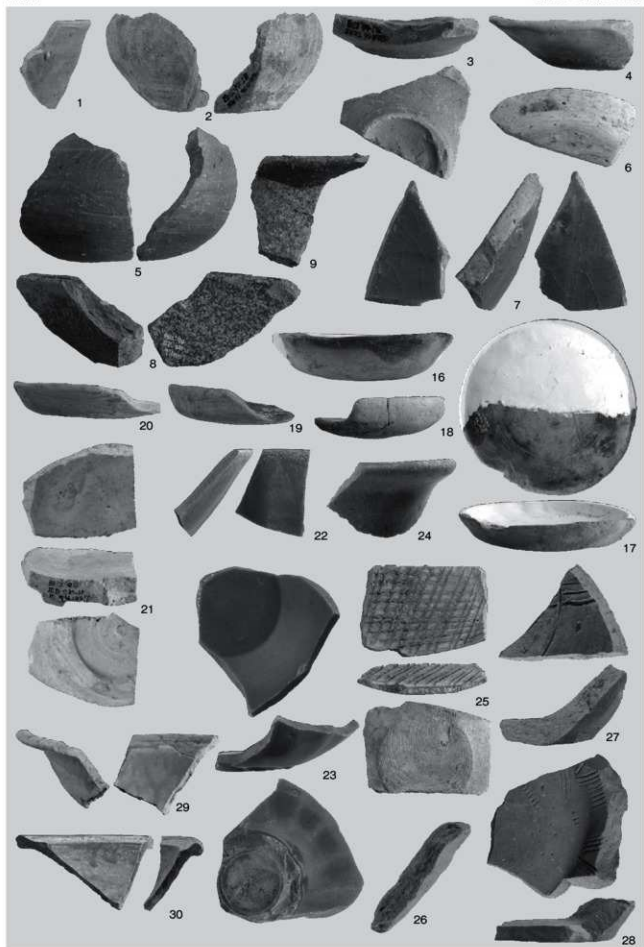
W区SD13 (北から)

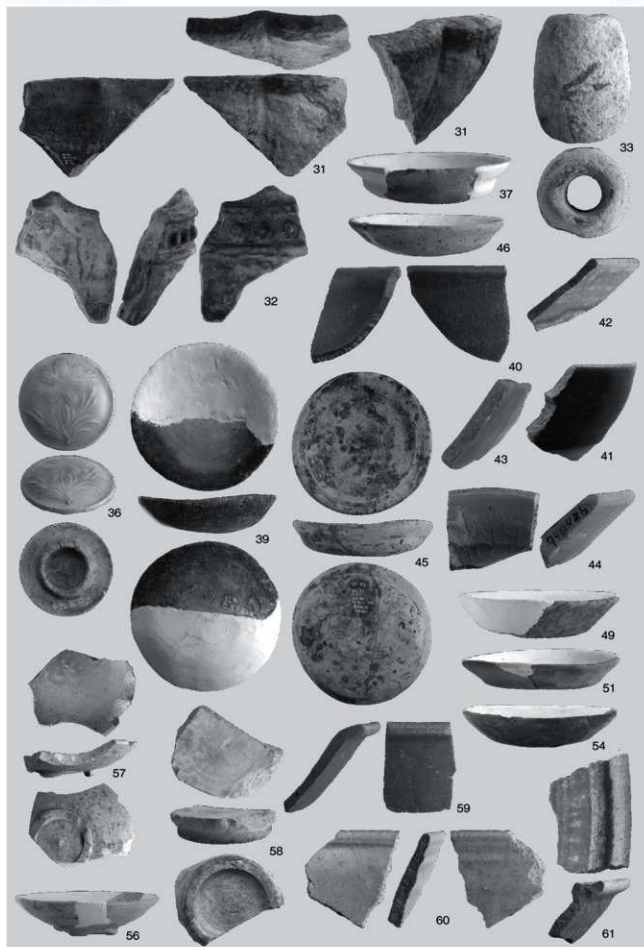


W区SD13検出状況 (南から)

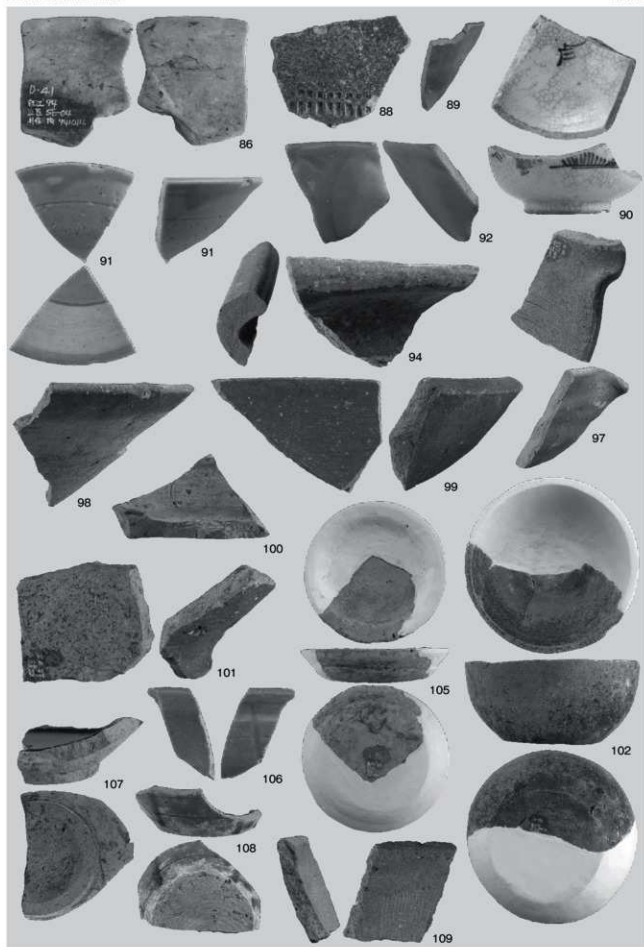


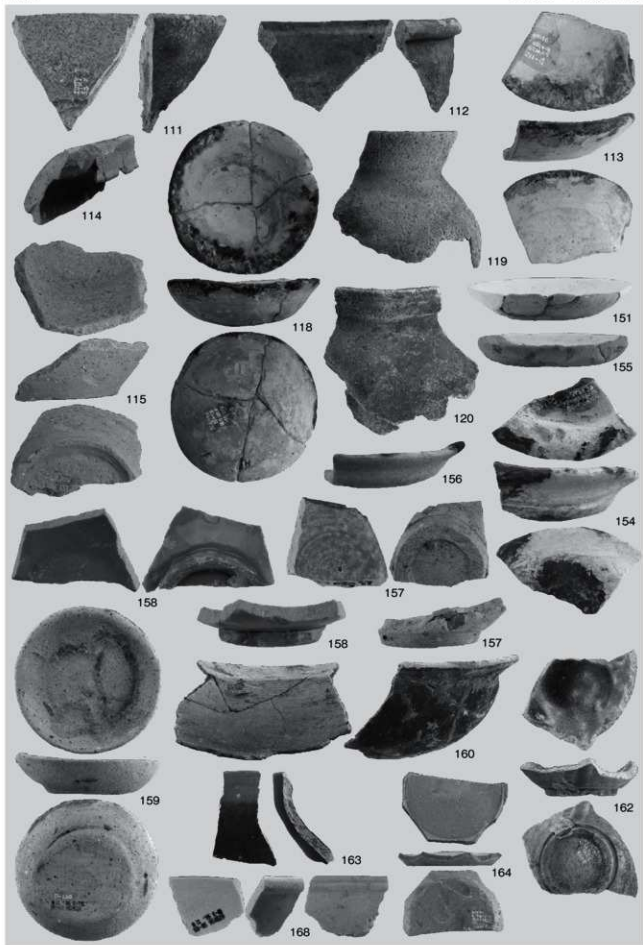
W区I13グリッド包含層遺物出土状況

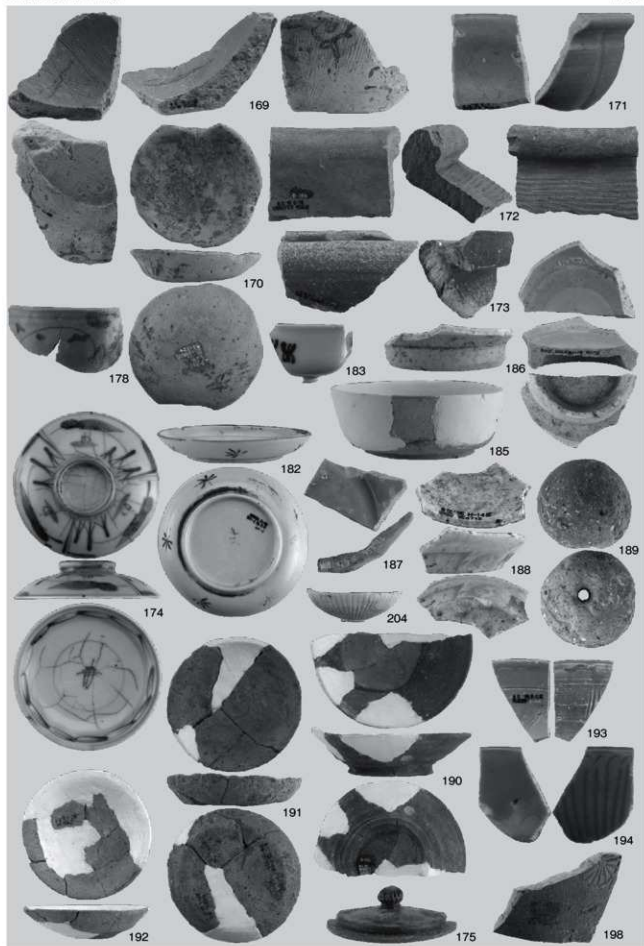




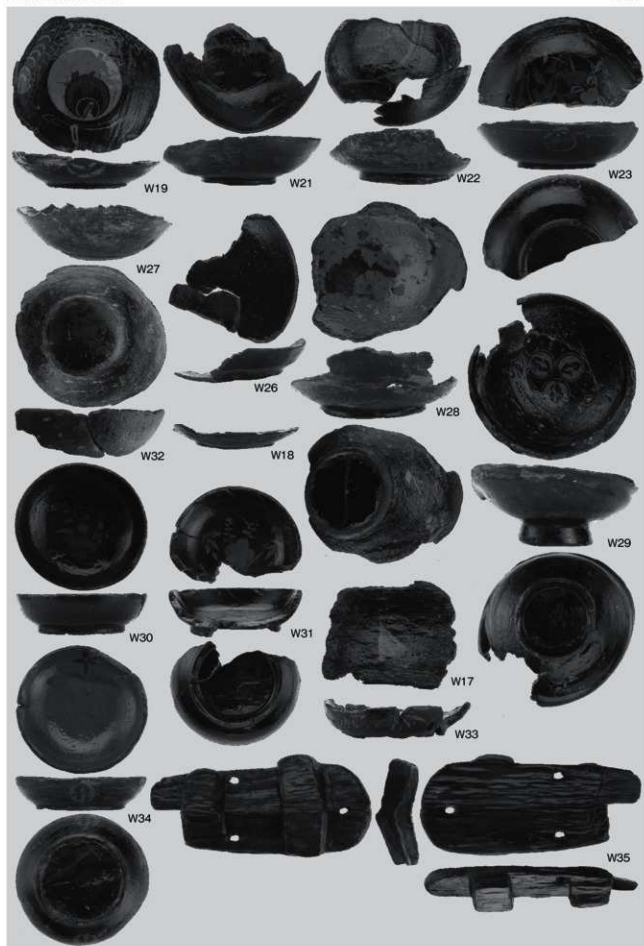




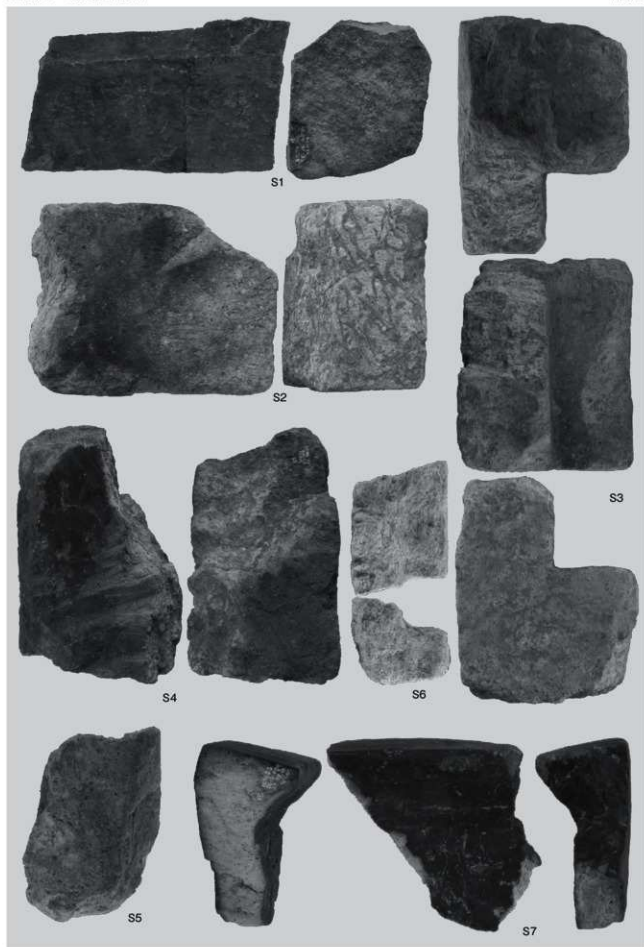


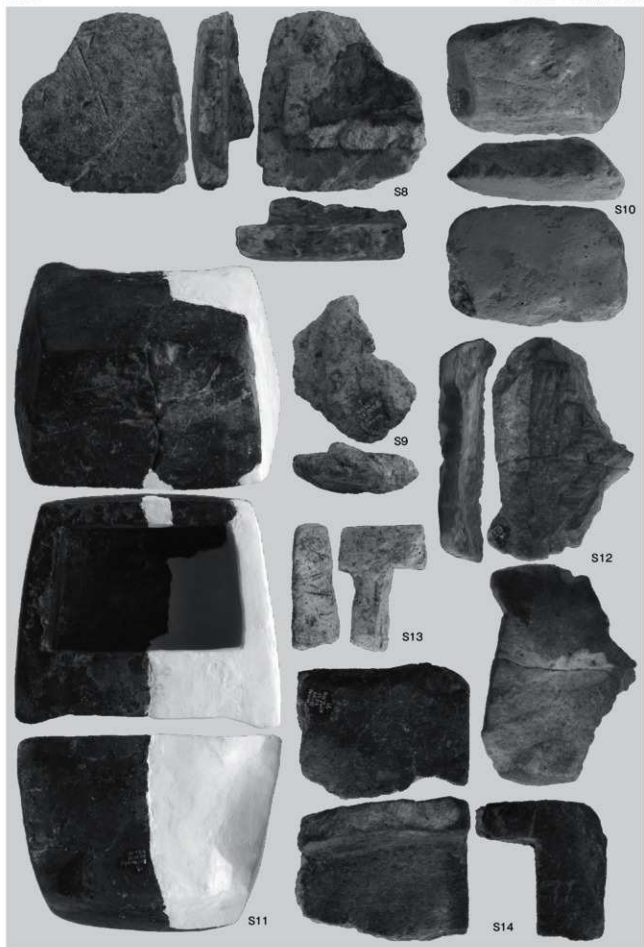


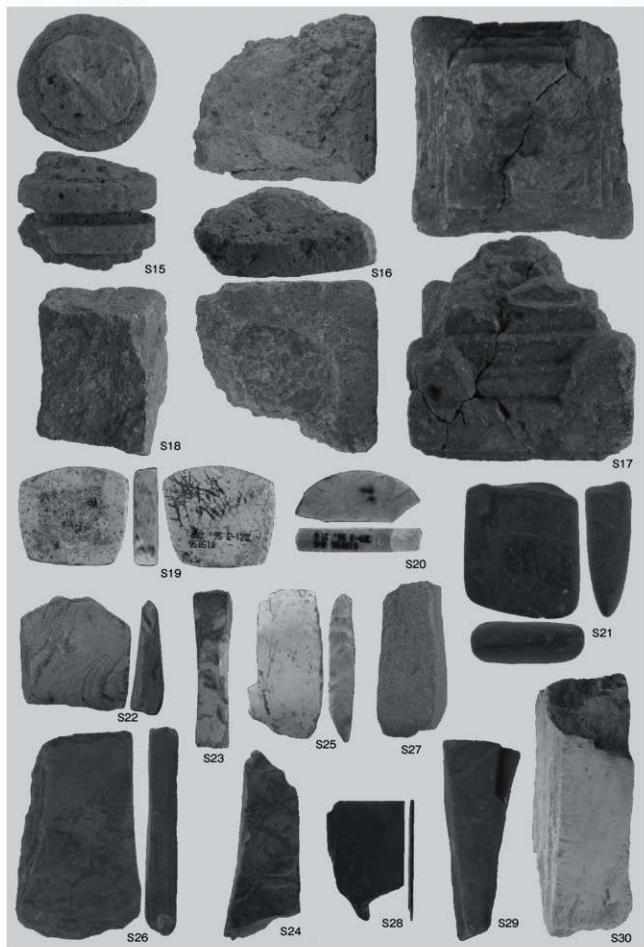


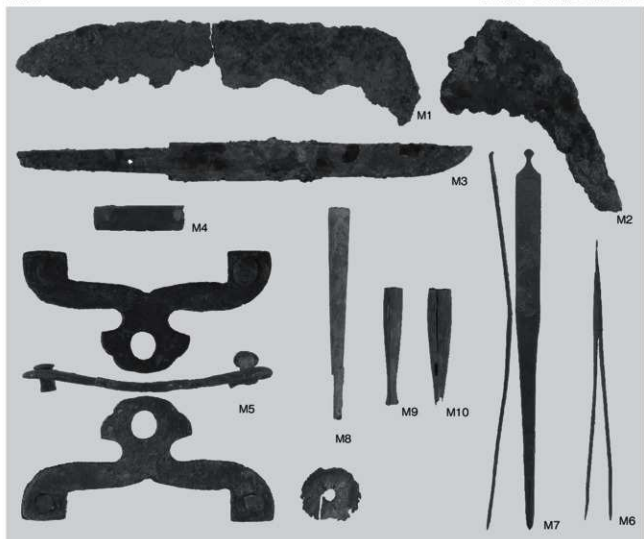














付図 白江梯川遺跡 (1994年度面調査区・95年度) 遺構図

上: 1/250

下: 1/150 (部分)



報告書抄録

ふりがな	こまつし しらえかけはしがわいせき							
書名	小松市 白江梯川遺跡Ⅲ							
副書名	梯川河川改修に係る埋蔵文化財発掘調査報告書2							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤田邦雄、浜崎悟司、森 由佳							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18-1 TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	平成23年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しらえかけはしがわいせき 白江 梯川遺跡	いしかわけん こまつし 石川県小松市 しらえまち 白江町	17203	03160	36度 24分 46秒	136度 28分 14秒	19940804 ～ 19941213 19950424 ～ 19950810	2,400㎡ 2,500㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
白江梯川遺跡	集落	古墳・平安 中世・近世		掘立柱建物、井戸 土坑、溝 井戸、土坑		土師器、陶磁器、漆 器、曲物、石塔		
要約	白江梯川遺跡の通算5・6次目にあたる調査である。古墳時代前期、平安時代後期、鎌倉・室町時代の遺構・遺物を確認している。主要な遺構として中世の掘立柱建物、井戸、土坑があり、特に井戸や土坑からは多量の木製品が出土し注目される。							

小松市 白江梯川遺跡Ⅲ

発行日 平成23（2011）年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842（文化財課）

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 能登印刷株式会社